661
/
26

0005450000

0005450-000

６６１－２６

斯人出でよ

松村介石・著

北文館

昭和９

ABC

斯人出でよ

松村介石著

北文館

昭和九年 帝國圖書館藏

661-26

斯人出でよ

自序

松村介石著

何んの爲に此書を世に出すか、曰く

七十六歳の此のお爺が、腹が立つて〳〵、たまらぬからである。何んが故に、そんなに腹が立つのか、曰く

先づ第一我が今日の政治界が駄目で、出るもの〳〵が、悪黨であるか、泥棒であるか、馬鹿野郎であつて、我國家と國體と

を、滅茶〳〵にして仕舞ふからである。

非常時〳〵と云ふが、如何にも今日は非常時だ。内は政黨が出て來て、私利を營み、私權を弄して、殆んど國家を無政府に陷ゐれ、何處もかも、白晝に其黨の無賴漢が徘徊する樣になつて居るし、外は白人野郎どもが、此日本を壓へつけんとして、よつてたかつて、恫喝たり、戰爭をいどむ樣な態度を示したりする計りでなく、本當にやつて來るかも知れない樣な、危急に迫まつて居るのである。

そこで齋藤内閣が、此非常時を救ふと云ふて押し出して來た。

因て何んな仕事をするかと見て居ると、第一彼方からや此方から前科者同樣の輩を聚めて來て、モザイク内閣を造るから、こいつは亦た駄目だと思ふて居ると、果して然りで、其後の爲す所を視ると、あちらへ嘆願したり、こちらへ哀訴したり、右の顏色をうかゞひ、左の御機嫌をとり、トウ〳〵尊氏問題や、綱紀問題なんどで、ギュー〳〵窘められ、泣き面さげて、尙其地位に留まつて居ると云ふ有樣、情けないとも、憤慨とも、何んとも云ひ樣がないのである。

此書の最初に出て居る大ピットと小ピットの二傳は、今より

三十年程以前、日露戰爭の直後、矢張り非常時と云ふので、斯る非常時には、斯な兩ピットの樣な、傑物が出ねばならんぞ、又國民も此兩ピットの樣な思ひ切つた決斷に富む、大英雄を總理大臣に戴かねばならぬぞと警告する爲めに、著作したものである。然るに時の政府當局は、己れらが其人でないので、却て其書の發賣を禁止したのである。そこで今回其餘りにきびしいと思ふ所、當時の忌避に觸れたと思ふ所を削除して、更らに之れを茲に公にしたものである。

又社會改良家六傑も、前年、社會改良家列傳と題して、世に公にしたものであるが、彼の癸亥の大震災で、紙型が燒失して、其後絶版となつて居たものである。然し此等の人物の必要は、其時よりも今日の方が、倍々的に必要となつて居るので、更に之を上梓したのである。

此社會改良家六傑は、孰れも皆往時の英國の社會改革に從事した英雄豪傑である。然しこれを當時の英國ばかりに必要と思ふなよ、今日本に、最も必要なる人物であるぞ。抑も我國體を何んと觀ずる。『義は君臣なりと雖も、情は猶ほ父子の如し』と云ふ御詔敕は、我が國體を一貫して居る大精神である。然るに今

日の我が日本社會は怎だ。一方には惡い事をして富んで驕つて、國を滅亡に導きつゝあるものがあるかと思ふと、一方には働いても〳〵御飯のたべられないものや、働うと思ふても職業がなく、職業があつても病氣で働らかれず、其上子供が澤山あつて、饑と寒さを凌ぎ兼ね、親子もろ共自殺するもの等が、日々の新聞紙上に滿載されて居る。これが我御詔敕にそふところの社會であるか、補弼の臣たるもの、之れを見て何んと思ふか、チツトも之れを救ふ社會政策を立てぬでないか、一體我國の今日の法律は、權者や富者を保護する爲に出來て居つて、細民は所謂告ぐる所なきものとなつて居る。余輩は左傾に與せぬ、それは左傾に與すれば、更らにヨリ惡い社會を現出するからである。露國を見よ、露國の細民界狀態は、宛然たる地獄である。余輩何にすれぞ、これに與せんやである。然し我が今日の此社會の慘狀を見ては、我國體上から謂つても、我御詔敕に照らしても、凝と默つて居る譯に行かないのである。されば諸君、ドウか此書を讀んで、其人となつてくれ給へ。又我國民もこれを讀んで、こんな人を出す樣に心掛けてくれ給へ。

我國は英國と其國體を異にす、況や聖天子上に在り、其言の

行はれ、其活躍の歡迎せらるゝや、夫れ期して待つべきである。

加之今や我日本は非常時に際して居る。併し此非常時を突破すれば、我國は必らずや、世界をリードする樣な國柄となるに定て居る。そうして古今東西の文明を併せ來つて、茲に新なる文明を起し、人類歷史に劃期的時代を現出するのに定て居る。余輩はモー餘命幾許もない。故に茲に此書を著はして、泣いて國民に愬ふる次第である。

昭和九年紀元の佳節

著者識

目次

大政治家

一、大ピット……一

二、小ピット……三二

社會改良家六傑

一、ウキリヤム・ラングランド……五五

二、ジョン・ボール……六五

三、トマス・モール……九〇

大政治家（兩ピット）

目次

四、ジョン・ウエスレー……一一七
五、ウイルバルフオース……一五九
六、シヤフツベリー……一九九

一、大ピット

大ピットの高風

予輩が玆に大ピットを説く、他意あるにあらず、蓋し我國現下の非常時に際して亦た此の大ピット出でよと望むが故のみ。

大ピットはコロムウエル。マルボロー。バルメルストン。ヂスレリー。チエンバレン等と其の類を同し、孰れも對外硬を以て鳴るものである。予は必しも此等の人に倣ふて對外硬を唱ふるものにあらず、然れども天下を擧げて只だ利是れ念じ、只だ慾是れ逐ひ、國家の元氣盪然として地を拂ふの當時に在つては、快哉を呼んで、英國の爲めに大ピットの出現を祝せざるを得ぬ。

當時英國の社會は如何なりしか、彼れマルボローは其缺點多きに係はらず、實に英國第一流の政治家なりき、軍人なりき、其の一たび出でて大陸に上れば、流石佛岸のルイ十四世も畢に頭を低れて、平和條約を結ばざるを得ざるに至つた、而かも時の頽俗には抗し難く、上流よりは血に渴く猛獸と譏られ、下民よりは物價騰貴の原因物と詈られ、終に權力の外に逐はるゝに至つた。其當時の英國が、如何に儒弱と射利にのみ陷りつゝありしかは之を以ても知るべきである。此時に當りて宰相サー・ロバート・ワルポール出づ。彼れは一世の大才子、卽ち大才子なりしが故に、かれマルボローの運命に鑑み、敢て風俗に抗せんとはせず、人民が金儲けに熱中すれば、金儲大によろし、金にあらずんば、世は到底渡り難しと說き、人民が奴隷賣買に大利ありと謂へば、やるべし〳〵〳〵、大に其業を擴張すべしと奬勵し、敢て人道を其の間に唱へんとはせず、只管世間の風潮を逐ふた。於此乎世は益々利害に動いて、曾て理義の問題に耳を傾けず、滔々として益々混濁汚流の下に沈み行いた。

大ピットは此ワルポールと時を同うして出でたるもの、父は地方の豪族なりき、之を以て鄕里より選ばれて國會議員たり。ワルポールは當時國會にあつて笑つて言へり、彼等議員の面々等は、いとも鹿爪らしく控ゆと雖ども、孰れも皆定價附きの品物のみ、彼れは一議會千圓にて買占め置きたり、此れは二千圓にて買ひ占め置きたり、彼處に在るものは五千圓、こは一黨中の口利きなるが故なり、而かも此處にあるものは一萬圓、此れは首領株なるが故なりと。

此の如くにして當時國會議員なるものは、皆擧く政府の手に買收せられ居たりき。然るに玆に一團の青年あり、自ら稱して愛國黨と云ふ、而してピットは之れが首魁であつたのである。

ワルポールは屢々之を買收せんと試みたりき、然れども彼等は常に斷乎として之を斥け、『凡そ己の權利を賣るものは、他日己の國をも賣るもの、今や國會は賣國の賊を以て滿さる、今にして此の賊を平げ、此賊を養ふものを權力の外に逐はずんば、英國の國家は亡びんのみ』と、切齒憤惋禁ずる能はず、何時もワルポールを罵つて止まなかつた。

ワルポールは前陳の如く才子なるが故に、勉めて寛容の態度を持し、敢て之にも抗せんとはせず、又た之を見て笑ふて言へりき、『ア、彼れ青年の元氣、亦た愛すべきものなきにあらず、而かも見よ、今に見よ、年の長ずるに從つて、慾亦た次第に長じ來り、終に彼れより買收を願ふの時あらん』と。蓋し此言や實に適切にして當時の人士に當て嵌るもの尠らず、先づ彼れサミュル・ジョンソンを見よ、ジョンソンは有名なる硬骨男子、其の青年時代に在つては『たとひ困窮して凍死餓斃することあるとも、余は人の慈悲を乞はず』と主張し、折角友人の惠み吳れたる美靴を摘んで、之を窓外に拋り出し、自己は矢張り裸跣にて歩みたるもの。而して又其の辭書を編するや、彼れ『受賞祿者』を解釋して、之は政府の奴隷なりと言へり。然れども其の齡老い慾長じて、借金山の如く重さなるに當てや、彼れは好んで『受賞祿者』となり、政府の爲に曲筆の勞を取りたるにあらずや。左ればワルポールは心密かに笑ひたり、而して曰へり、『今に見よ、かれピットの青二才も、自ら好んで收賄者の群に入り來るべし』と。蓋し當時の收賄者若くは變節者は、正にワルポールの言の如く、未だ始めより彼の如き無腸漢若くは軟骨動物にてはあらざりしなり。然れども徒らに虛榮に馳せて、驕奢を衒ひ、所謂る高襟以て俗に倣はんと欲するところより、遂に其の身を賣るに至るもの比々皆是れなりき、何ぞ我今日の政界と相類するの酷しきや。左ればピットは早くより玆

に慮る所あり、人は馬車にて横行するも、己れは徒歩にて之れに從ひ、人は綾羅を輝かすも、己れは疎服にて之に接し、獨り心を高尚にして、將に時の來るを待ちたりき。

嗟呼我國の政治家諸君よ、諸君は此一段を讀み來て、果して如何なる感想やある、今や悔ゆるも晩かるべし、而かも諸君の墮落したるゆゑんのものは、皆此大ピットに倣はざるの罪なりと知らば、豈亦た黯然たらざるべけんや。

大ピットの呼號

ワルポールは笑つてピットの軟化を期待し居たりき、然れども畢に大失望に會したり、其はピットが收賄漢の列に入らざるのみか、年と共に元氣を振作し來り、國會毎に勢力を增し、果ては議場を動かし始め、將に己が地位までをも危ふくせんと爲したれば也。ピットは實に絶代の雄辯家たりき、其細かに說くときは水の滾々として流るゝが如く、其の怒つて激する時には、風濤の天を捲くが如く、之を聽くものをして、神飛び魂醉ふの妙術を具ふる外、己れ洵に國を憂へ、民を思ふの熱誠に燃えしかば、常に人を感動せしめざるを得ざりき。

謂ふこと勿れ、黨議已に定まる矣、議論以て之を變ずる能はずと、又た謂ふこと勿れ、議會已に收賄漢を以て充つ矣、正義公論の通ずべき餘地なしと、極めて然らず、是れ己が無能無力を表するに過ぎず。如何に收賄漢なればとて、如何に黨議に決定したりとは言へ、人皆心あり、若しも我れに於て熱誠を有し、條理を說いて之に向はば、たとひ表面には之を贊成する能はざるも、心は已に我れに動き、長の年月の間には、遂に我に投じ來る。是れ數の最も觀易きもの。左ればピットがワルポールの買收政略を攻擊するの間に於て、ジョージ王の虛榮的外交を

攻撃するの間に於て、天下の腐敗を憤慨し、壯んに亡國論を絶叫するの間に於て、國民の良心は漸く此に覺醒し來り「如何にもピットの謂ふが如く、人皆利情に驅られて、功利に驅せ、義魂こゝに消滅せんとす、斯くては一朝事あるの時は則ち國家滅亡の時と知らざるべからず」と、ソロ〳〵ピットに和する者の增加する折柄、果して玆に一朝事あるの時に遭遇した。

事とは何ぞ、時とは何ぞ、對外問題卽ち是れなり。此時に當りて、英國社會頽廢の影響は、忽ち海外の殖民地までにも及びたり。北米に於ては英民佛民と相轢り、終に干戈に訴ふるに至りしが、英民は散々の目に逢ふて敗北せり。又た東印度に於ても英は佛と戰ふて大いに負け、敗報荐りに至るに會へり。於此乎英國の民心は漸やく動き始めたり、彼等には愛國の精神悄沈し居たりき、然れども利害の觀念は益々盛んになりつゝありき。於此乎、今若し北米を失はんか、忽ち貿易上に大損害を來し、宇內到る所、佛民の爲に其利を奪はるべきは、火を觀るより明かなれば、竟に之れに耐へ得ざりき。

因てピットは此時を機として、愈よ叫び始めたりき、『ア、我が英國の同胞よ、爾等はエリサベス時代を忘れたるか、『アルマダ』艦隊を擊破したる當時の元氣を失ひたるか、爾等が今日の驕奢に耽り得るは、卽ち祖先の猛勇能く國の爲に戰ひたるに由るに非ずや。爾等何ぞ俄かに墮落して、我祖先を辱しめ、遂には其身の利害をも忘るゝ迄に至れるや』と。人民は之を聽て、漸やく戰爭熱を興し來れり、而して時の海軍艦隊司令長官ピングは、正に脾肉の嘆に勝へず、自ら艦隊を率ゐて佛軍を地中海上に攻擊せしが、不幸にして其利を失し、貿易上咽喉の地たるミノカ島を、佛の爲め奪はるゝに至れり。英人は此敗報に接して愕然たりき。因て此際戰敗したりとは云へ、最も勇敢に戰ひ、最も大膽に振舞ひ、戰鬪に於ては

更に非難すべきものあらざりし此のビングを、臆病者なりと稱へて、之を銃殺の刑に處するに至りたり。於此乎ビットは國會に於て叫んで曰く、ビングは決して臆病者にあらず、時の不利を見て、一時其の場を避けたるのみ、然るを馬鹿者共は、妄りに罪をビングに歸し、以て敗北の腹癒せを爲さんと欲す、たとへ今日ビング一人を殺すとも、之れに由つて我國元氣の勃興し來る理由はあらざるなり。抑も我國元氣の悄沈せるや既に久し。上には幇間のワルポールを戴き、下には賣節漢の議員を集め、以て我國を支配せんとす、其の宇内到る處に敗北を招かんことは寔に物の數なりと謂はざるべからず。苟くも英國の人民にして眞にビング一人に憤る心あらば、何ぞ此の腐敗漢此の賣節漢此の幇間宰相を逐はざるやと、意氣激越、轉じてジョージ王の不品行にまで、其の舌鋒を差し向けた。

凡そ人を責むるものは先づ自ら責むるものたらざるべからず、凡そ人を治めんと欲する者は、先づ自から治むるものたらざるべからず、賊輩賊輩を罵り相呼んで喧囂す、此れ實に茶番に過ぎず。壯んに人の收賄を罵るも、己れ亦た收賄に類する汚行あらば如何。口癖に世の頽廢を嘆息するも、己れ亦た頽廢の一分子たらば則ち如何。我が今日日本幾多の政治家たるもの、教育家たるもの、新聞記者たるもの、概ね之れならざるはなし、其の人の動かざる宜べなりと謂ふべし。

然れども此ビットは此種の人にあらざりき、彼れは人を責むるの權利を有したりき、世の腐敗を叱咤するの資格あるものなりき。

こゝを以て、如何に彼れが罵るとも、一言彼れに向ふて辯じ能ふものなく、只だ彼れが滔々と辯じ去り辯じ來るの言下に、耻ぢつゝ謹聽するの義務を負はされたりき、是れ豈に絶代の快事にあらずや。

大ピットの輿望

ワルポールは嘗て笑ふて、ピットの腐敗するを期待し居たりき、而かも彼れは遂に腐敗せず、却てワルポールをして第一に失望せしめ、第二には戦慄せしむるまでに、其の大勢力を振ひ來るものとはなりぬ。人民は叫び始めたり、而して曰へり、『如何にもピットの言の如く、凡そ今日の天下を正さんものは、身自ら治むるものたらざるべからず、然れども上は大臣を始め、下は議員に到るまで、悉く皆其の人にあらざるが故に、我等をして寧ろ今日より即ち此ピットを頂かしめよ、行政は弛廢し、財政は紊亂し、情實四方に纏綿して、之れを刷新する頗る難し、之を爲す、恐らくはピットを措て又た他にあらざるべし』と。於此乎ピットの呼聲は、遠く僻陬の村落にまで響き渡るものとはなりぬ。

語を寄す、我邦今日の政治家諸君よ、諸君の中ピットたる者は果して誰れぞ、身に一點の汚行なきものは誰ぞ、獨立獨往、終始其の身を賣らざる者は誰ぞ、高潔其の身を持し、清貧其の分に安んじ、巍々乎天下を以て任ずるものは誰れぞ、若し夫れ諸君にして其の人にあらずと知らば、過つて改むるは大丈夫の憚らざる所、今より決然其の人たらんを期し、以て吾人の望みに副はざるや。今や人腐り、俗敗れて天下義に勇むものなきが如しと雖ども、是れ一時の變象のみ、諸君にして一旦自己を正して起つあらば、天下豈に之に應ずる者尠しと言はんや。此のピットを見るべし、而して又た當時の英國社會を想ふべし、彼等は墮落しぬ、而かも一旦覺醒し來るときは、遂に『ピット出でずんば蒼生を奈何』と迄叫ぶに至りしにあらずや。

當時貴族にてデボンシアイアル公なるものあり、曾てピットと友とし善し、一

夕ピットを訪ひ、談内外の事に及び、卒然ピットに向ふて曰く、『今や天下刷新を要す、然れども君の屢々唱ふる如く、又た民の方に叫ぶが如く、如何に立派なる宣言を爲すとも、如何に立派なる言説を弄するとも、某々等の如く、其身の品行すら改むるを知らざるもの、富豪と結んで其身の生活を維ぐもの、若くは官を私して泥棒を爲すが如きものは、到底天下を正すに足らず。左れば今の時に當りて之を能くせんものは、只だ夫れ獨り君あるのみ、君能く敢て之が衝に當るや否や』と。然るにピットは又昂然として答へて曰く、『固よりなり、今の時に當つて、此の狂瀾を廻すものは、恐らく予を措いて又た他にあらざるべし』と。此於乎、デボンシャイアル公は直ちにジョージ二世に謁して告げて曰く、『今や師、外に敗れ、政、内に失し、人心將に變を思ふ、今にして衆望あるものを上に置き、以て斯民を御するにあらずんば、或は復たゼームス王等の覆轍を蹈まんか』と、蓋し革命の起るを意味するなり。於此乎ジョージ恐れて其の人を尋ぬ、因て答ふるにピットを以てし、遂にデボンシャイアル公を首相に推し、ピットを内務大臣に据え、爰に内閣を組織せしむることゝはなつた。

大ピットの政治

ピットは今や内務大臣となれり、此於乎ドシ〳〵法律を勵行し、貴顯にても、紳士にても、議員にても、豪商にても、苟も賭博を爲し、汚行を爲し、收賄を爲すものあらば、片つ端より征伐し、遂に宮中をすら攻撃し、而して『上の好む所下之より甚だしきものあり』との論法を以て、遠慮なく革新の手腕を八方に伸べたり。國民は大に之を歡迎したりき。然れども上流腐敗の亡者等は、遂に之に耐ゆる能はず、日々にジョージ王に迫り、更に又た好人物なるデボンシャイア

ルにも迫り、とう〳〵デボンシヤイアルをして首相を辭せしむると同時に、併せてピットをも退かしむるに至つた。

ピットは笑ふて野に下れり、然れども國民は承知せざりき。ロンドン市民は直ちに市會議場に相會して、協議して曰く、『這回ピットを逐ひ出したるは謂はれなきものなり、今の時に當り、その能く内政を刷新し得るものは、ピットの外復た他にあるべからず、吾人は今回ピットの退けられたるを非理なりとし、更らに彼れを戴かんことを決議す』と、而して首府已に之を爲せり、地方豈に之に倣ふものなからんや、則ち英國の重立ちたる市町は悉く皆ロンドン市會に倣ひ、同じくピットを戴かんことを望むと云ふの決議を爲したりき。

貴族テンブル男はピットが妻の兄に當れり、於此乎宮中は驚き、此のテンブル男を利用し、ピットに金を握ませんことを計り、一萬圓の年俸を供せんことを以てしたり、ピットは怒つて退けたり、而して之を聽きたる人民は、益々其の高潔なるに感激し、愈よピットを出せよと叫んだ。ニューカッスルは、第二の内閣を組織すべき命を、ジョージ王より受けた、然れども、今日の勢ピットを除きては内閣を組織すること能はざるを以て、更にピットに交渉し、其の閣員たらんことを以てした。ピット答へて云へり、『予れもし再度閣員に加はることあらば、内務大臣にては事足らず、即ち内務、外務、軍務の三職を授けよ、而して殆んど首相の實權を我れに與へよ、然らずんば天下の革新は期し難し』と、ニューカッスルは一時これには躊躇した、然れどもイッソ彼れを容るゝ程ならば、思ひ切つて、彼れに萬事を行らせんと決心し、直ちにジョージ王に奏問して、其の如くに實行した。

抑もピットが此のニューカッスル内閣の下に、内務、外務、軍務の三大臣を兼ね、

以て天下に臨みし時は、是れ卽ち彼れが全盛の大時期にして、劈頭より其の出で方が面白かつた。ピットは第一最初の國會に於て宣言して曰く、『今や予れ重任を負ふて玆に立つ、今日より爲すところ或は諸君の氣に入らざるともやあらん、然れども予は國を思ふの心を失はざる限りは、斷じて之を止むる能はず、又た予は斷じて之を爲し得んことを誓ふ』と、斯くて傍らに座したるジョージ王を一睨して曰く "Sir, give me your confidence, I will deserve it." 王よ予れに信用を置け、予れには卽ち其の價値ありと。然るにジョージ王は又た已むなき態度にて答へて曰く "Deserve my confidence and you shall have it." 『汝は予が信用に値ひす、汝それ之れを行へ』と。ピットは終始傲慢なりと謗られたるものなり、然れどもいやに氣取つて傲慢なりしにはあらず。我邦今日の政治家の如く、外貌を飾り態度を裝ひ、周圍の人に、見よがし、聽けがしに威張りたるにはあらず。卒直其の儘、自信のある所を、無遠慮に言ひ、無遠慮に行ひたるまでにして、所謂『私心なき傲慢』なりしなり。こゝを以て此點に於ては、餘り不評判を招かざりしのみならず、却つて國民は其の豪直の性を愛し、彼れの如きものにあらずんば、今日の天下を匡す能はずと噂し合へり。

此に於てか、ピットが第一に大改革を施したるは、陸軍の上なりき。由來軍人界ほど改革の六ケ敷ものはない、然れどもピットは斷乎として之に當り、ヨイヨイ老爺にて軍職を汚すものを退け、青年を擧て要地に置き、天下の惰心を一覺せんと試み、こゝにウルフを加奈陀に送つた。ウルフは當年漸く三十三歲、豪膽にして熱誠なる好漢なりしが、早くもピットの目に留り居りしものゆゑ、ピットは之を拔いて少佐より少將に榮轉せしめ、之を加奈陀の總督と爲したり。ウルフが加奈陀に於ての動作は、此に詳說するの時なしと雖ども、略して之を言はゞ、彼れ

加奈陀に渡りて佛軍を窺ふに、佛軍は連戰連勝の餘威を受けて、其鋒鋩正面より當るべからず、由て間道を迂りてアブラハム峠を踰へ、兵數僅かに五千を以て後背より佛軍の本營を襲ひたりしが、其の之を襲ふの前、其の兵士に令して曰く、

『汝等は十有五間以内まで近よるにあらずんば、敵に向ふて發銃すべからず』と、

其奮闘の決心を見るべきである。斯くて突擊已に始まるや、彼れは腰部に一丸を受けた、然れども手巾を以て其の上に當て、漸く出血を拒ぎつゝ進んだ、然るに又銃丸飛來して、其の腕を貫く、而も尚ほ屈せず、益々進擊を號令して迫りしに、更に又た一丸あり、來つて其の胸部を穿つた、於此乎、擔はれて營所に歸り、氣息淹々將に最後の呼吸を引かんとす、然るに此際傍らに立てるものゝ口より『アア逃げる逃げる』との聲を聞くや、ウルフは忽ち豁と大眼を開いて、問ふて曰く

『何者の逃げるにや』と、侍者答へて『佛軍の逃げる也』と告ぐ、彼れ則ち莞爾として頷いて曰く、『アヽ、我れは斯くてこそ幸福に死するを得』と。

ウルフの此の意氣は確かに利害の外に超脱したるものなりき。其の死を賭して奮闘したる狀態、其の國の爲めに殪れたる精神は、收賄以て其の節を賣り、私營以て我利を圖りたる時の腐敗漢とは、大いに其類を異にしたるものなくんばあらず。左れば英國民は此のウルフの戰勝を聽き、其の勇敢なる戰死を聞くや、盛んにウルフを激賞し、併せて之を選拔したるピットを褒め、ピットをして益々改革の手腕を伸ばしむるに、十分の自由を與ふるに至つた。

更に又た眼を轉じて東印度の方を望めば、最初葡萄牙と相軋り、葡萄牙の退き し後は、佛と確執し、互に貿易地若くは殖民地を有して爭ひ居りしが、當時英はマドラス、ボンベイ、カルカッタ等に貿易地、否、寧ろ殖民地を設け、佛はマドラスの南ポンデゼリーに之を控へ、相睨んで紛爭絶へず、折から佛は土地の酋長

等と結び、全く英の貿易地を覆へして、之を己れ一個の壟斷地と爲さんと欲し、著々其策を盡し始めた。於、此乎、當時英の東印度商會に一個の書記として働き居たる青年あり、其名をクライヴと云ふ、奮然起て衆を勵まし、最早や一日も躊躇すべきにあらずとなし、直ちに在留の英國人若干を以て、一隊を組織し、佛人をアルコットに擊て大勝を得、殆んど南方印度を占領して、其勇を轟かし、一時英國に歸り來れり。然るに其後クライヴの不在に乘じ、ベンガルなる土人の王にて、佛人に同情を寄するもの、不意に遠征隊をマドラスに向け、マドラスなる英人百四十六人を捕へ、之を有名なる『黑穴』に押し籠め、熱氣と渴と窒息とに由り、殆んど之を慘殺したる者ありき。左れば當時英國に歸り來りて、陸軍少將の官職を授けられ、世人より印度の英雄なりと囃され、ピットよりは『天生の將』なる賞言を受け居たるクライヴは、更に印度に渡り行き、こゝに有名なるブラッシーの大戰を惹き起したり。此役や英は六百の本國兵と千五百の土人兵よりヨリ多くを有せざりき、而してベンガルの王は六萬の軍勢を集めて控へたりしなり、而かも此の『天生將』たるクライヴの指揮の下に動きたる兵士の進擊には敵すべくもなく、土人兵は須臾にして大敗し、爾來佛人も土人も盡く英人の前には頭を擡ぐること能はずなり、全印度は畢に英領たるに至るの端緒を此に開くに至つたのである、而して是れ實にピットが政治の全盛時代に入りし年、卽ち千七百五十七年の出來事なりき。

左れば見よ、ピットが一たび大權を振つて對外硬の政策を取るや、今日の加奈陀領は其時より英國に歸し、今日の印度は其時より英國に屬し、通商貿易の業は、此兩地より發展し來り、英國は武勇の名と共に富榮の實を此間に開いた。かくして英國の元氣は此時より勃興し始め、遂にエリザベスとコロンウエル時代に

復しぬ。當時バーレーなる大佐あり、曾て人に語つて曰く、『誰人にてもピットに會て歸る時には、其以前よりはヨリ勇膽なる人に化成し來る』と、當時如何にピットが國民元氣の源泉となりしかは、此一語を以ても知るべきにあらずや。アヽ軟弱にして單に智巧をのみ弄する我國の政治家に支配せらるゝ國民は禍なる哉。

斯くてピットは、次に行政と財政とを整理し、内は百般の弊政を一時に刷新するの實を擧げ、外は普のフレデリッキ大王を援けて、諸列國に當り、内外共に其の勢力を揮ひ居りしが、ジョージ二世崩じて、其の子三世其の後を嗣ぐに及び、意見之と衝突して、遂に野に下るに至つた、當時歐洲の敵人皆相與に語つて曰く、『嗚呼コロムエル、漸く倒る』と、其のピットが如何に當時天下の怖恐の的となり居りしやを知るべきである。

大ピットの掉尾

ジョージ三世の時代に於ては、ピットに就て語るべきもの尠し。其は彼れが其後神經衰弱の病患に陷りたればなり。彼れは此際に於て『モゼイック内閣』を組織し、笑ひを後世に遺したりき。彼れは此際に於て華族に列し、チヤタムの爵を受けて貴族院に入り、以て民心を失へり。其の他狂態痴容、轉た吾人をして其末路を悲ましむるもの多しとす。然れども此に掉尾の一大快事あり。ピットが野に下りて後、英國政府は、北米合衆國の獨立戰爭に會ひ、意氣再び沮喪し來つて、將に頭を低れて佛國と和を結ばんとした。ピット時に歳七十、病んで將に死せんとす。然れども今や英國が佛國に頭を垂れて、其の歡心を買はんと欲するの醜態あるを聽くや、病床に横つて叫んで止まず、曰く、『予れを速かに貴族院に運べ

よ、予は如何に病苦に襲はるゝとも、國家の屈辱を默過する能はず』と、衆人皆其の病態を告げ、其の或は死に至らんことを言ふ。ピット卽ち目を瞋らして叱して曰く、『死か、予が死は恐るゝに足らず、予は國家の死を恐る』と、於此乎其子ウイリヤム並びに家僕數人附き添ひて、馬車を徐行せしめて、貴族院に至れば、今や討論最中なり、ピット卽ち漸く病軀を壇上に立たしめ、逼る呼吸をあらん限りに絞り立てて曰く、『アヽ貴族諸君よ、予は今一脚にて此に立つ、其は他脚は已に墓中に在ればなり、然れども予は今日の如き國家の危機に際しては、呼吸の續かん限り叫ばざるを得ず、我國は已に北米獨立に會ふて古來の武威を落したり、猶ほ此上膝を屈め頭を低れて、和を佛國に入るべきにあらず、記憶せよ、氣魂一たび此に挫せば、國家の滅亡踵を回さゞる中に來り迫らん。諸君或は言はん、是れ一時の休戰に過ぎずと。然れども我が頭に汚し我面に泥し、罵詈以て我を辱かしむるも、我れ猶之れに怒る能はず、卑辭蒲伏以て專ら其の宥免を請ふが如きは、是れ國家元氣の銷散を證するもの、國家元氣の銷散は國家滅亡の門戸なり。諸君又た謂はん、今日の勢ひ事實戰を繼續するの餘裕なし、强ゐて之を繼續せんと欲するものは、所謂る暴虎憑河の類のみと。然れども退いて守る、是れ亦た難し、吾人は意氣の銷散と共に斃れざるを得ず、斃れん乎斃れん乎、寧ろ同じく斃れざるを得ずとせば、吾人をして男子らしく斃れしめよと。"If we must fall let us fall like man"』と、是れ其の大略にして結尾の一語燦として光彩を放つ。此の演說は約一時間餘に亘りしが、其の初めは微音にして聽き取り難き程なりしも、遂に其の激するに及んでや、電光閃き雷鳴響き、實にピットが壯年時代を想はしむるものありたりと云ふ。

斯くてピットの大演說終りし後、リッチモンド起ち、之れが反對を試みしが、

ピットは靜かに毛布に包まれながら、側への椅子に坐して之を聽き居り、其不同意のある毎に、頻りと白頭を振り居りしが、リッチモンドの演說の終る頃には、最早や堪えずやありたりけん、眼を張り、齒を嚙み、眉を顰めて、殆ど其座に耐へざるが如く、斯くて其演說の終るを見るや、奮然毛布を拋り棄て、病軀を忘れて立ち上がり、大音聲を張り揚げて、再び反駁の大演說を試みんとせしが、其の未だ數言を發せざるに氣を失ひ、横ざまに壇上に仆れたり、而して之れぞ此れピットが臨終であつた、時に千七百七十八年。

余輩はピットに就て尙ほ語るべきもの多くを有する、然れども多く語るが目的にあらず、細かに說くが主意にあらず、唯だ夫れこゝに其の梗概を髣髴せしめて、大いに我國人を警せんと欲するのみ。彼れの議論に於ては同意し難きものなきにあらず。彼れの狂熱に於ては贊同し難きもの尠からず。然れども彼れの生涯を見よ、今日の日本の腐敗は殆んど英國の當時に類す、而してワルポールの如き才人相ひ續いて政界を左右し、賣節變說、收賄汚行、到る處に起る。此の時に當りて、ピットたるものは誰ぞ。淸廉潔白ピットの如き者は何人ぞ、淸廉潔白或は有らん、而かも猛意直往、能く亂麻を截つて進み得るもの果して誰ぞ、猛意直行のみならば、かれ蠻勇の徒、或は之を能くせん。而かもピットの如く國望を擔ひ、人心を得、國民輿論の代表者と爲つて來り得るもの果して誰ぞ。今の日本の政治家は、衆望を得んとて汲々たり、而かも虛榮に驅られて、ピットの如き淸貧閑居以て時を俟つの忍耐に乏し。今の日本の政治家は各々自負して己惚る、而かもピットの如き修養なきが故に、辯は雷を轟かす能はず、議論は識者を服せしむるに足らず、手腕は疾風を捲く能はず、左眄右顧して、竟に事務を快にする能はざるもの比々然り、焉ぞピットの如く民心を得ることを得んや。語を寄す天下の政治家諸君よ、

諸君眞に今日の國家を刷新せんとするの大望あるか、請ふ先づピット傳を讀み、而して實力と道德と豪意とに着眼し、其無私無慾にして、專ら國勢の恢復にのみ其の力を濺ぎ、七十歳の高齡と垂死の身とを以て、猶ほ能く危機を聽いて起ち、遂に斃るゝまでも、國家の元氣を鼓舞して止まざりし、彼れが誠意に學ぶところあれ。諸君が今日事を爲し能はざるは、畢竟諸君が其人にあらざる爲めのみ、何ぞ復た他を咎めんや。

予は敢て斷言す、ピットに於ても非難すべき點尠からず、殊に神經衰弱に陷りたる後を以て然りとす。然れども人心利に馳せ、義魂地を拂ひたる當時にあつて、唯り巍然として昂立し、憂國赤誠を推して、一代の惰眠を覺醒し、狂瀾を既倒に回しタるものは、卽ち確かにピットの呼號と其の行動とに由ることを知る。かれツラファルガルの海上に『義務』を叫んで奮鬪したるネルソンも、ウオータルローの激敵に雷電を叱咤して立ちたるウエリントンも、確かにピットの子たるなり。若しもピットをして出でざらしめば、英國の天地に利害以上の大精神を鼓吹することは難かりしならん。身を以て世を率ゐたる人格の感化は、千載の下、猶ほ風を聞いて起たしむるものあり、吾人が今日に於てピットを說く豈にそれ望む所なしと言はんや。

二　小ピット

青年時代

小ピットとは其人物の小なるを以て謂ふにあらず。其大ピットの子たるが爲である。彼れは大ピットの第二子にて、千九百五十九年に生れた、幼より聰明にして大志あり、稚童の時より其母に向ふて『坊は父さまの如き大政治家となるのじや』と言ひ居りしが、十四歳にしてケンブリッヂ大學に入り、十七歳にして『マスタル、オブ、アーツ』の學位を受け、十九歳にして父を喪ひ、二十一歳にして國會に入つた。其ケンブリッヂ在學中、學識に於ては勿論、雄辯に於ても、當時彼れの右に出づるものあらざりしかば、人々皆驚て『流石に大ピットの子であ

る、他日英國の宰相たるべきものは、必ず此人ならん』と噂し居りたりしが、果して彼れが國會に出でゝ、始めて論辯を試むるや、僅々二十二歳の青年なりしに拘はらず、其學の廣くして、其辯の堂々たる、恰も大政治家の如くなりしかば、或者ボルクに向て、彼れは流石に父の子なり』と云ひしに、ボルク答へて『否、父の子にはあらず、彼は已に父其自身なり』と述べたと云ふ。又た或人フォックスに向つて『彼れも往々は國會議員中第一流の人物たるべし』と云ひしに、フォックスは直に答へて、『否、彼れは已に其人なり』と陳べたりと傳へらる。

左れば小ピットは其初陣より成功した。然れども彼れは此際毫も虚榮に驅られなかつた、卽ち其身の榮譽榮華を念頭に掛けなかつた、彼れの願ふところは其父の志を嗣ぐにてあつた、父は清貧を以て甘んじ、曾て世俗の誘惑に陷らざりき、父は高潔の志を持し、一生其の身を辱めざりし、而して主とするところ

は私を棄てゝ公に奉ずるの上にのみありたれば、此小ピットも亦た其政治界に出づるの當初より、固く此心を持して動かず、而して終始其父に倣ふて、此心誓を破らなかつた。

千八百八十二年ロッキングアムの内閣となるや、ピットは愛蘭會計次官の高職を受くることを勸められた、然れども此を辭して曰く、如何なる高職なるも、予は内閣の外に在りて、責任を帶ぶるを屑とせずと、蓋し内閣員となるにあらずんば、如何なる職をも受けずとの意であつた。其傲慢に構ゆるの嫌ひあるも、何たる見識ぞや、ピット時に齢二十三。之を我國の青年に較し見よ、如何なる相違ぞ、次官はおろか、參事官でも、書記官でも、忽ち喉頭を鳴らして出づる輩と較して如何。且つ愛蘭次官の高職には、五千磅卽ち五萬圓の年俸之れに從ふなり、而してピットは當時其の父と同じく貧窮にして、僅々三百磅の年俸に其生活を維ぎ、總ての交際と政治運動とに大不自由を感じ居たのである、而かも彼は自重して出でず、以て其心願の金錢、若くは獵官以上に在りたるを見るべし。

斯くて間もなくロッキングアム死して、セルボルンの内閣となるや、ピットはいよ〳〵主稅長となつて其閣員に列つた。然るに當時政黨に三派ありき、一は此内閣に屬してセルボルン及びピットに率ゐらるゝもの、一はフォックスを首領とするもの、他はノース卿を戴くもの、而してフォックスは民黨を代表して、終始改進主義を唱へ、ノースは王黨を代表して、百事保守政策を執り來りしに、こゝに、セルボルン内閣の成立するや、フォックスは其主義と主張とに拘はらず、款をノースに通じ、セルボルン内閣に逆ふて同盟を結んだ。是實に奇怪なる現象である。保守黨と進步黨、王黨と民黨とが合體したるなり。左れば國民はフォックスの卑劣を詈り、ノースの無主義を喝り、此連合を野合と唱へて賤しめしが、黨員

幷に兩黨の議員は、暫く忍んで時を待つた。嚮てセルボルン内閣が米國の獨立を承認して、之れと平和條約を結ぶに至るや、右の連合黨は力を極めて之れに反對し、

『是れ大失政なり、英國がそれが爲めに蒙る國威の損失は測るべからず、何んぞ今暫く忍耐せざりしぞ、若しも今暫く忍耐することあらば、米の屈したるや知るべきのみ』と呼號した、蓋し彼等が斯く論ずるは、其反對黨たるが爲めのみ、而して單に内閣を乘取らんと欲する志望に出でたるのみ。

於此乎ピット政府を代表して、古今稀有なる大答辯を試みた、吾人はこゝに之を詳説するの時を有せぬ、然れども其主意と結尾とを言へば左の如し。

かれ反對黨の議論なるものは、其眞意に出でざるや瞭かなり、彼等は只だセルボルン内閣に反對せんと欲して反對するのみ、何んとなれば此戰爭を惹起したるものは、ノース内閣時代に在り、故にノース黨なるものは、此事件に關して言を容るゝの權利を有せず、將たフォックス黨はかねてノース内閣に反對して其政策を詈りしもの、而して此戰爭の終局を望みしもの、俄かに野合を遂げたればとて、吾人は今更彼等が主張を繇へすを許さずと。

蓋し内閣乘取のみの目的のために、其異主義者の連合を罵倒したのである。斯くて最後に宣べて曰く、其れ然り然れども予一人のみに就て之を云はゞ、内閣が誰人の手に渡るとも、更に之を嫉むの心なし、予が政界に於ける大覺悟は、終始國を思ふて私を思はざるに在り、予は一生此覺悟を持し、一生此心誓を破らざらんを期す。是故に權力と富貴とは、予に向ふて誘惑力を有せず、若しも適任の人、誠意の人、高潔の人にして、吾人の後繼者たるものあらば、予は直ちに辭職せん、予は只だ國家の上を思ふのみと。

不幸にして此際セルボルン内閣は、此の連合黨の爲めに破られた、而して次で

ポートランドを首相に戴くフォックスとノースとの連合内閣となつた。然れども國民は最早や此フォックスとノースとを歡ばなかつた、其心術の卑劣にして、互に主義を賣りたることに愛想をつかした、而して益々ピットの高潔なるに同情を表して來た。ピットは敗れた。然れども其誠意に於て勝つた。國民はピットに野心なきを疑はなかつた、富貴と功名とに支配せらるゝ人物にあらざることを看取した、而して是れ實に大政治家として國民を率ゆるの資格であつた。かの公黨と稱して其實私黨たるもの、主義を賣て敵黨と野合するもの、權力と富貴と功名のみを冀ふて妄りに言論を弄するもの、是等は唯り英國の當時にのみ限らず、我が今日の政黨にもあり、其信を國民に失し去るや當然と謂ふべしである。

左らば此のフォックスとノースとの野合内閣は、決して永く續かなかつた。啻に國民が歡迎せざりしのみならず、黨員の間に於ても、久しく其主義を異にし、久しく其感情を害し居たることゝて、常に其間に軋轢を絶たず、斯くて終にジョージ王に反對せられて、其印度案の上院に敗るゝに至るや、空しく土崩瓦解し去つた。

首相時代

連合内閣の倒るゝや、ジョージ王はピットに新内閣の組織を命じた。ピット時に齡二十四、而かも敢然として之れに當つた。友人は危んだ、是れ議員の多數を敵として立つものなるが故である。然れども國民は大に彼れを奬勵した、而して曰く今日の時に當りて、我等を率ゐ行かんものは、己のが功名富貴を思はざる至誠の人物たらざるべからず、而して今日に於ては、獨りウイリアム・ピット其人あるのみであると。

然るにピットが宰相に擧げらるゝや、更にピットをして國民の偶像たらしめた一大事件が起つた、然りピットに於ては無意識なる行動にてありき、而かも其無意識なりしが故に、益々ピットの名譽を擧げたのである。

爰に一種の閑職があつた、年俸三千磅にて、從來屢々首相の兼務たりしものなりき、然るに當時此官職に缺員を生じたれば、國民は皆此職をピットが自領すべきものと期待した。蓋しピットは當時益々貧にして、氣の毒なるほど難澁を感じ居つた。然るにピットは猶豫なく直に之れを、大佐バーレーに讓つたのである。バーレーは大ピットの友人にして、嘗て國家に盡瘁したるものたりしも、今や失明して、空しく貧生活を送りつゝある憐れなる一老人であつた。左れば國民は之を聞くや嘆稱措く能はざりし、史家マコレー曰く、『凡そ如何なる政治家も其政策については多少の非難を免がれず、一方に賞するものあれば、必ず他方に貶するものがある、然れどもピットが己れは三百磅の年俸に安んじながら、三千磅の年俸を人に讓り、利慾の一念を己のが脚下に蹂躙したる行動に關しては、誰人も其高德に服せざるを得ぬ、彼れは多くの勳章を人に與へた、而も己のが一身には其一をも受けなかつた。千萬の金は彼れの手を通じて行きぬ、而かも彼れ自己は赤貧にて暮せり』と。ア、之を自己の手を通じて自己に勳章を授け、自己の命によりて自己に俸給を增す、彼れ東洋の政治家に比して見よ、其差果して如何ぞや。サーロー卿も亦た自白して曰く、『予は今更の如くに羞づ、予がピットに向て此職を受くべく勸めしことを、予は斯る大人格の前に立て、始めて自己の低卑を自覺せり』と。左らばピットの人格が幾多の事實に照して其眞物なることを證明したれば、國民は之をフォックス若くはノース等と對照して益々其高貴なるを感じ、糾然としてピットに同情を向くるに至つた。ピットの馬車の過ぐるところは、人民の脫

帽と歡呼とを以て迎へられ。ピットの招待を受くるところには、人民群を爲して來り集つた、而してピットは其始めフオックス、ノース、セリデン等の黨員を先方に廻して戰ひしことゝて、屢々議會に敗られしも、其終に國民の同情を確むるに至るや、彼れは議會を解散した。

從來の議會に於てはピットの味方は少數であつた。然れども當時總選擧を行ひたる結果によれば、反對黨は百五十人を減じ、其缺陷は盡くピット黨の爲めに占領せられた。左らば當時彼れフオックス、ノース、セリデンの如き大政治家を以て、此のピット一人に當りしも、最早や之れに敵すべくもあらず、而してジョージ王も亦た此際大にピットを扶け、『予れはピットを失ふよりは、寧ろ王位を棄てゝハノヴエルに歸るべし』とまで公言した。於此乎其後十七年間の英國は卽ちピットの英國にして、ピットの傳は卽ち英國の歷史となつた。吾人はこゝに英國史を叙するの時を有せず、然れども一言以てピットの爲したる事業を云へば、此間彼れは印度を商會の手より奪ひて之を政府に隷屬せしめた、是れ往時にフオックスが試みて失敗したるもの、而かもピットは之を成し遂げて英國政府に大權を移した。次で彼れはウヰルバルフオースを扶けて奴隷廢止の議案に贊成し、一時に之を通過せしむる能はざりしも、年を逐ふて其志を貫徹せしめた。次に彼れはジョン、ハワードの監獄改良案に同情を寄せ、英國監獄の面目を革めた。斯くて言論の自由を擴張し、國會の議論を新聞紙に載するとを禁じたる法律を廢し、國民と共に國家を經營する上に一歩を進めた。又た風俗の取締に力を用ひ、種々の法律を設けしが、此は法律を設くるまでもなく、彼れ自己が身を以て率ゐしことゆえ、上下共に戒飭し、下より上に賂ひ、上より下を買收する如き惡習は、此時代を以て終焉を告げ、能く大ピットより引き嗣ぎたる感化力を完成した。加之彼

れは此際道路を改造し、運河を新鑿し、通商貿易の業を奬勵し、當時に勃興し來れる機械の發明を利用し、英國をして古今未曾有の富境に進めしめた。英國が此際ピットの政策に由りて繁榮したることは實に非常であつた。而して後日那翁より起りたる二十年の大亂に堪え得しも、全く此時代に於けるピットの政策が、其宜しきを得たるに由るものと斷定せられて居る。

晩年時代

小ピットが在職中に於ける大出來事は、佛國革命の大亂であつた、前陳の如くにして、ピットは自由進歩の味方なりし、其民黨なるフォックス等と相對し、ジョージ王の親任を得たるを以て、王黨たるが如き嫌ありしも、ピットは世に所謂る王黨ではなかつた。左れば佛國の革命起るや、之を以て佛國が自由に入るの階段となし、ボルグ等が其餘響の危險なるを說くことありしも、斷じて之れに反對し、只管佛國の革命を歡迎した。然るに其後佛國が革命の流弊に陷り、暴民政治の支配するところとなるや、混亂至らざるなく、加ふるに天下一般の王國を斃して、悉く皆之を共和政府たらしむべしと叫ぶのみならず、其遊說者を英國に派遣して、英國の民を煽動するに至るや、最早や棄て措き難きことゝなし、墺普露等と相結んで、佛國に當つた。左れば英佛は從來よりの競爭國とて、忽ち大陸に於ても、海上に於ても、其他宇內に散在する諸殖民地に於ても、到るところに英佛の開戰を見るに至つた。吾人は此に戰鬪記を容るゝの時を有せず、而かも一言にて之を云はば、佛に一世の英雄那翁が出現以來、英の苦鬪は非常なりき。大陸に於ては伊も西も蘭も瞬く間に佛の足下に征服せられた、而して普、墺、露も佛に向つては顏色なく、歐洲の天下は、當時革命を經て血に渴ける佛に敵するものあら

ざるに至つた。然れどもピットは流石に大ピットの子であつた、如何なる苦境に陷るとも、決して英國の國威を辱しむまじと決心し、此間に苦心經營せしこと非常であつた。海に於ては古今の英傑ネルソンあり、又た之れに亞でホーあり、ダンケンありき。然れども陸に於ては一人の英雄をも見ず。ウエリントンの出でしは、ピットの死後に屬することゝて、大敗又た大敗、前途茫として希望を維ぐべき由なかりしかば、英國民の悲觀は日々に長じて、平和を望むもの多かりき。然れども彼れピットは頑として動かず、謂へらく那翁の野心は英國を征服するに在り、左らば平和を求むるは、正しく降服を求むるなり、已に降服を求めんか、折角其の父の經營したる加奈陀も、印度も、今日より佛の勢力に屬すべく、エリザベス、クロンウエル以來、獲得し得たる領土も、名聲も、今日を以て終焉を告ぐるなるべし、豈之れに堪ゆべんや。吾人は最後の一人に至るまで戰はざるべからず、其の父なる大ピットが臨終の時の大演說に叫びし如く、"If we must fall let us fall like men."『斃れん乎、斃れん乎、寧ろ同じく斃れざるを得ずとせば吾人をして男子らしく斃れしめよ』とは、是れ亦た小ピットの覺悟なりき。於此乎ピットに反對するものは、其猪突無謀の政策を罵りたりき、私利を思ふて國民を思はざる貿易者等は、其營業に大影響を及ぼすを見て、ピットより同情を引き去りぬ、增稅又た增稅に會ふて、物價騰貴し、國債又た國債を重ねて、國民の負擔の數十億圓に上りたるを見る悲觀者は、ピットの冒險を危みたりき、而してジョージ王も今はピットにのみ其信用を置き難しとなし、從來の關係より離れ去りぬ。

愛蘭は多年英國の額瘤なりき、幾度か征討せられ、幾度か連合せられたりと雖も、未だ曾て心服したることなかりき、蓋し其人種を異にし、宗教を異にするを以てなり。於此乎當時更に反旗を翻へし、援助を佛國に求めしかば、佛國は

戰艦と上陸兵とを之れに差し向け、此方面よりして英國を襲はんと企てた、尤も此計畫は挫折せられて、愛と佛とは其志を得ると能はざりしも、ピットは從來よりの持論として、此の際大に愛蘭人に自由を許し、之を英に合併せしめんと謀つた。然るにジョージ王は俄に之れに反對し、天主教國たる愛蘭人に自由を許して、之を英國人同樣に取扱ふことは、我卽位の誓言に反すとて肯んせず、强て之を辯ずれば、則ち怒りて『予は此天主教案を許可するよりは、寧ろ歐洲中を乞食し廻るを好む』と暴言した。因てピットも、今は國王の信用を失ひたるを悟り、此際斷然野に下つた。

次でアッデングトンの內閣となつた。アッデングトンは今日に於ける我國の政治家の如く、第二流の人物のみ、而してピットの如き豪意を有せず。於此乎間もなく佛と平和條約を結びて、此に一時の偸安を保ち得た、悲觀者は歡び、弱心者は安心した、然れども此時に當つていよ〳〵歐洲の覇權を握りたる那翁は、長く英國に平安を許すべくもあらず、其一時的條約は、適々大擧して英國を襲ふの準備を爲すに過ぎざれば、此際大計畫を以て、英國を一擊の下に粉碎すべく企てた。英人之を知りて漸く眼を醒し始めた。而してピットの見識と其覺悟とに同情を表し始め、如何にもピットの說の如く、佛國は決して英國と平和の交際を爲すものにあらず、我れ彼れを殺さずんば、彼れ必ず我れを殺さんと叫び始め、然らば此際アッデングトンの如き第二流の人物を戴くの日にはあらず、再びピットを呼び出せよ、再びピットに政務を執らしめよと主張し始め、遂にジョージ王をして國民の聲に從ふの止むなきに至らしめた。

吾人は此第二ピット內閣に就ては多く語るの要はない、而してピットが如何に此際內外に苦心の經營を爲したるかを詳說するの時を有せぬ。彼れは大敵を前面

に控ゆる時なればとて、擧國一致の緊急事たる所以を說き、かねての政敵たるフオックスをも其内閣に入れんと試みた、フオックスは承知せず、而かも從來よりフオックスを好まざりしジョージ王は之を聽かざりき、而してフオックス已に内閣に入らずとせば、當時一方に民黨を率ひたるグランヴイルも亦た之れに入ることを肯んせず、附てはピットを孤立の地位に落し去つた。因てピットは止むなくアッデングトンと交渉した、然れどもアッデングトンは、己のが地位を奪ひしものなりと怨み、ピットの苦心を心地よげに眺め、其後聊か助力の勞を取りたりしも、間もなくピットを見捨て去つた。然則此際に於けるピットの苦心は、實に慘憺たるものにてありたりき。斯くて外戰如何と顧みるに、那翁の勢力は、いよ／＼ます／＼歐洲を壓下し去り、また之れと抗するもの無きに至れるのみならず、動もすれば、英國を孤立せしめて、宇内の壓力を英國に加へんとするの虞れありき。

因てピットは墺露と結び、大に那翁を挫折し吳れんと企て、今や其畫策中に在りしとき、爰に偶〻ツラファルガルの大勝に會した。

ネルソンのツラファルガルの海戰に於ける大勝利は、已に我國の兒童にさへ知れ渡つて居る著名な事實であるから玆には詳說せぬが、ピットは之を聞て大に其意を强ふしたが、併し間もなく更にアウステルリッツの敗報に接した。アウステルリッツは露領に近き墺國に在り、此の時墺露の兩帝は孰れも親ら兵を督しつゝ、聯合軍を率ひて那翁に戰を挑んだが、固より那翁の敵にあらず、卽ちアウステルリッツに於て大敗し、其將卒の一萬を屠られ、二萬を虜にせられて遁走した。爾來露帝は縮み上りて復た出でず、墺帝はいよ／＼兜を那翁の前に脫するに至つた。ピットは豪膽不屈の壯者であつた。然も其體格は幼少の時より虛弱なりき。左れば當時大に其身の健康を害し、醫士より靜養を勸められ居たりしが、此大敗

報に接して、病魔の乘ずるところとなり、終に千八百六年の一月『オヽ英國よ、英國よ、予は如何に汝を見棄てゝ去り能ふぞ』と口中にて獨語しながら、昇天した、時に年四十有七。

吾人は爰にピットの詳傳を描くものにあらず、唯其人物如何を我日本に紹介することを得ば卽ち足る。さても此兩ピットは、如何に偉大なる人格ぞや。韓退之嘗て伯夷を頌して曰く『昭乎たる日月も明とするに足らず、崒乎たる泰山も高とするに足らず……夫れ聖人は萬世の標準也……二子徽せば、亂臣賊子迹を後世に接せん』云々と。若しも兩ピットに此言を呈せば、彼等は必ず其諂諛を怒るべし、然れども英國の社會が此二子を待て、政界の賊子卽ち私位者若くは私利者を後世に絕ちし上に於ては、確かに伯夷の頌を受くべき價値ありと信ず。況んや伯夷の末路は終に首陽山に饑死するに過ぎざりしも、此二子や然らず、一は七十歲の老軀を以て、猶は國を思ふの情に禁へず、壯んに國家の危機を指し、國民の元氣を鼓舞しつゝ死し、一は臨終に際して他事を云はず、只だ憂國の情を洩しつつ死せり、當時英國の國民が、風を聞て起ちたるや、宜べなりと謂ふべし。

之を聞く木戸松菊の將に死せんとするや、『アヽ西郷もモーよせばよいのに』との一言を遺せしのみなりきと。西郷も亦た吟じて曰く子孫の爲めに美田を買はずと。嗟呼今や斯人なく、政界混濁を極めて、內に孑々の發生するを見るのみ、之を廓清せんものは果して誰ぞ、風を聞て起たしむるものは果して誰ぞ。國民よピットを呼び出せ、世豈ピットなからんや、其出でざるは、之を呼ぶこと切ならざればなり。政治家よピットの蹤を追ふて來れ、天下豈靡然として應せざらんや、其應せざるは、未だ其人格の卑きに坐す。彼のワルポールを退け、此亡國奴を平げ、而して我大日本帝國をして那翁後の英國たらしめんものは果して誰ぞ。今やネ

斯人出でよ

ルソンは在り、ウエリングトンは出でぬ、而かもビットや無し、是れ此の傳ある

ゆゑんである。

社會改良家六傑

一　ウイリヤム・ラングランド

ウイリヤム・ラングランドは、一三三二年に生れ一四〇〇年に死んで居る。彼は英國のオックスフォード、シャイアーの農夫の子として生れ、十四世紀英國史に非常特異なる役割を演じて逝いた。

十四世紀の英國は、殊にラングランドの一生に於て、實に多事多難を極めた。英國は正に、大暴風雨の大海を難航する難破船の如くであつた。外はスコットランドとの戰爭絶えず、其にフランスとの間には彼の有名なる百年戰爭が勃發する、外征は連年止む時無く、國庫は空乏して民は增稅に困しみ、殊に衰れなるは當時の農民であつた。そこへ黑死病が流行して、英國の人口は一擧にして半減す

ると云ふ悲慘事が起つた。然るに一方國王や貴族は、此の中に在つて、入つては高樓玉殿の中に歡樂を恣にし。出でゝは、美衣錦繡に身を飾りて轔々馬車を驅り、其の費に窮すれば、更に農民を搾取する。此の時に當つて、宗教界亦た腐敗し、ウイックリフがオックスフォード大學から、宗教大改革の狼火を擧げ、其の徒は乞食僧となつて四方に散亂して、農民の間に潛入し、宗教改革と社會改革の機運を鼓舞激勵し、遂に農民の大謀反となり、十萬の大衆がロンドンに進軍し、ロンドン郊外に、國王リチャード二世に强要すると云ふ。風雲暗澹萬物凄愴の時代であつた。而して此の大波瀾大紛擾の中から、近世英國の自由なる社會が生れ出たのであるが、この大機運の抑々の首唱者は、卽ち此れから述べんとするウイリヤム・ラングランド其の人である。

ウイリヤム・ラングランドの幼時は、今は詳でない。只彼が農夫の子なるが故に彼が襁褓の中からして、如何に人生の悲痛、世の慘苦を味ひ盡したかは、想像が出來る。彼は青年時代より有名なるマルボルンの寺院に入りて僧となり、三十歳の頃までは、說敎と禮拜等にのみ從事して居たが、時勢益々非に、貧民益々塗炭に苦しむを見るに忍びず、卽ち筆を執つて『農夫の詩』を賦した。三十歳の頃、ロンドンに出で來り、其れより長くロンドンに居住したが、彼は生涯を通じて窮乏のドン底に在つた。彼は一妻一女を抱え、葬式の挽歌や哀悼歌を歌つて、僅に細い炊煙を立てゝ居たが、時には其の炊煙も絕えて釜鍋其の職を失ふ事も珍らしくなかつた。然しながら彼には大丈夫の心魂が有つた。貧して憊するが如き者ではなかつた。破れた長い上衣を纏ふ長身圓頭の彼れラングランドは、昂々然としてロンドンの街を濶步して憚らなかつた。途に貴族、華族、富豪の徒に會ふも、一切脫帽せずと決心した。馬車轔々として塵を捲いて來る、咄、此の馬車何

物ぞ、此れ取りも直さず下民が汗血の凝結物、而して此れに乗る者は、尸位素餐の徒か、然らずんば、民の膏血を絞る怪賊のみ。彼等何が故に貴き、彼等何が故に人類の華なる、予れ甚だ之を解するに困しむと説く。輪奐殿宇天を摩し地を廻る、彼れ之を見て心甚だ平かならず、咄！彼等何が故に此等の輪奐を要する、何が故に此等壯大なる殿宇を要する、容るゝところ膝三尺に過ぎざるにあらずや、用ゆるところは、書齋、寢床、客室、庖廚に過ざるにあらずや。然るに之を經し、之を營し、華奢其分を越えて、而かも尚以て足れりとせず、夏は清涼の地に別莊を設け、冬は温暖の境に別邸を控へ、珠を炊ぎ桂を焚き、酒池肉林に人となつて更に同胞の疾苦を顧みない。其の一方には、年豐かなるも妻は餓に泣き、冬暖かなるも兒は寒に叫び、夫婦倶營して而かも其腹を充すに足らず、苛政に驅られ、暴民に苦しめられ、終に自殺を幸福と觀ずるもの、道路到る處に多からんとす。吁、是れ果して何たる社會ぞ、是れ地獄其物にあらずして何ぞ。予れは上流社會なるものゝ果して上流たるや否やを知るに困しむ、之をしも上流と云はば、山賊の窟、海賊の室、孰れも皆上流の金殿玉樓にあらざるはないと喝破す。

而かも此の沈痛矯激なるラングランドをば、當時の人は狂人とした。然り彼の心は、此の不合理なる社會を見、此の滿目可憐なる同胞を見ては、不平憤悱殆んど狂するばかりであつた。彼は僅かなる收入を以て口を糊しながら、滿腔の磊塊を披瀝し來りて、乃ち農夫の詩を作る。其の心沈痛、其意悽愴、同情極つて悲涙禁ずる能はざるものであつた。卽ち其詩に曰く、

『觀よ黑死病年々に至る、是れ豈天の咀呪にあらずや、詐るもの、媚ぶるもの、虐ぐるもの、苦しむもの、怒るもの、盜むもの、殺すもの、高ぶるもの、傲るもの、擾々紛々、世將に亡びんとす、何ぞ悔改せざる。汝動僞子よ、閉目し

て觀じ來れ、貴賤上下は浮世暫時の間のみ、いづれ三寸息氣絶ゆれば、輙ち一棺無差別の土芥のみ。北邙山下より迚り來れよ、ラザロを却つてアブラハムの懷に見ん。警せよ、醒せよ、天に神あり、人に道あり、而して社會に四海同胞の眞理存す、嗟呼今や斧を樹の根におかる、凡て善果を結ばざる樹は、斫られて火に投げ入れらるべし、豈猛省せざるべけんや、」云々。

又他の一詩は、

『予れ世上の情なき狀態を眺めつゝ往くほどに、但見れば一人の農夫の耡を杖つきつゝ、茫然と停むありけり、其帽は破れて蓬髪破口より出で、其衣は澁紙と古布とにてつゞり、其靴は指を吐き、其容態は瘦せ衰へ、其顏は憂慮に老ひ、其眼は涙含めり、而もなほ以て息ふこと能はざるにや、やをら再び妻を呼び立て、耡をおさせてすき始めしが、妻の裸足よりしたゝる生血は、みる〳〵地上に痕を印しぬ、あな悲慘！而かも是れ悲慘の極にあらず、看よや田畝の此端を看よ、舂に入れられたる二人の子が、饑と凍と寂寥とに、其膓も裂るゝ計り、聲をかぎりに泣き居たりしが、彼の農夫の兩親は、耡きもどりて來て之を眺め、互に面を見合せ、愁然として大息せしが、やがて其子を叱して曰く、子供よ靜かに』

右は彼の詩のほんの一二節に過ぎない、彼の詩の底を流るゝものは、慘怛たる下民の實狀に對する深刻なる同情と、此の社會萬惡の根源に對して憤興する烈々火の如き道念であつた。彼の詩は、英國に於て未だ曾て有らざる汚辱と苦難の時代を包括する。詩中に農夫バイアルスなるものを置き、バイアルスをして熾んにヒューマニチーの至道を唱道せしめ、其唱道に由て、大いに處々に悔改者を生じ、遂に社會を一新せしめるを以て、眼目とする。彼自ら作詩して自ら歌ひ、當

時農民の中に潜入する幾百千の乞食僧、又之を誦歌しつゝ往き、聽く者をして、或は悽然哀を催さしめ、或は愴然席を起たしめ、或は心胸沸々禁ずること能はず、遂に耡を投じて、劍を握らしめんとするまでに至らしめた。然らば此詩が、果して如何なる大影響、大感化を、當時の天下に及ぼしたるかは、多言を費すに及ばぬであらう。英國史に有名なる十四世紀の農民の大謀反なるものは、多く此の詩の鼓吹するところに由ると云はゞ、卽ち足るであらう。

そこで終りに一つ理窟が有る。世には詩だの、文章だの、演說だなどは、空理空論にして、實際には何の用にも立たぬ、と云ふ者が有る。世の中に此れ程淺薄な、迂濶な議論は有るまい。歷史を見給へ、如何なる大運動、如何なる驚天動地の改革も、其始めは舌と筆に依らぬものはない。先覺者先づ一管の筆に生命を籠めて世に訴へ、三寸の舌血を吐いて絕叫し、而して天下の人心を鼓舞激揚し、以て社會の道心を警發せしむる。斯くして志士出で、義人起り、社を結び、團體を作り、やがて實行に入るのである。言論文章には、實に量り知べからざる大偉力が有る。之れ無くして、單なる實行と云ふものが、人間の世に果して有り得るか。米國の勇將シャーマンは、南北戰爭に於て勝利を得た所以のものは、我が率ゐる五萬の兵よりも、寧ろビーチャー・ストウが草したるアンクル・トムの一卷に負ふ事大であると云つた。フランス革命の中には、ルソーの議論が化身して、縱橫無碍に働いたとは、フランスの歷史家の一致するところである。日本に於ても、賴山陽の日本外史一篇が、如何に明治維新の志士を鼓舞したかを見るがよい。英國の社會論者は、皆ラングランドは英國の社會改革家の卒先者にして、其草したる一篇の詩は遂に人口に膾炙し來て爆發し、農民の奮興となり、謀反となり、大革命となり、而して遂に天下社會の警鐘となつて、今に至つて其の洪音を止めない

と云ふではないか、詩人の力も、偉大なりと云ふ可きである。

今や十四世紀は既に去る矣。然れども下民の狀態は依然として慘憺、現に見るが如き世相である。貴族、華族、富豪、政治家なる者等が、其の爲す所を見よ、別莊又別莊、別邸又別邸、輪奐は美を極め、自動車は煙塵を捲いて其の間に往來す。而して曾つ一片の慈善善行に及ぶ者有るを聞くは稀である。吁、ランゲランド其れ終に出でざるか、乞食坊主亦た意に出でざるか、筆を投じて大息するのみ。

二　ジョン・ボール

一

ラングランドは、「農夫の詩」を作つて、時勢に憤慨し、自ら作り自ら歌ひ、人又た之を傳誦して、當時の社會に深甚なる衝動を與へた。ラングランドは、長身圓頭、沈痛激越なる詩人である。其の胸に萬斛の愛心を湛え、全身の熱血は、沸いて一管の筆端に迸り、其の詩の傳誦と共に。行く所、幾千幾萬の人を化して、人道の戰士たらしめた、而して之が大なる原因となつて十四世紀英國史に有名なる農民の大暴動となつたのである。然かもラングランドは、遂に一個の詩人である。杜鵑、半宵血に啼いて、天下の義人の奮起を促したまでである。然るに茲に

此の悲痛哀切なる叫び聲に打たれて奮起し、風雲を捲き起し來つた者が、又た自ら別に有る。此から述べんとするジョン・ボールの如きは、乃ち其の尤なる者にして、英國の農民の大暴動を捲き起し來れる大張本の一人である。

此のジョン・ボールは英國のケントに生れ、ラングランドと同じ時代の人である。その人と爲りを云へば慷慨にして義烈、豪宕にして無撓の男子であつた。而してラングランドと同じく、當時の英國の社會を觀て憤惋措く能はず、いかにも して內、宗教界を清め、外、政治界を改めんものをと、夙に志を立てゝ私かに經營苦慮する中、時にウィックリーフが、オックスフォード大學に在つて、宗教大改革の大獅子吼を擧げ始めたのである。

左れば、玆に暫くウィックリーフと當時の宗教界及社會に就いて、少しく說く所有らねばならぬ。ウィックリーフに就て、比較的能く知り得るは、其の後半生二十年餘、卽ちオックスフォード大學に在つて、彼が宗教改革の大狼火を擧げ始めてからの事である。細々とした彼の體、過度の勉强と苦行に窶れた容、一見したところ、極めて內氣らしい此の人の何處に、當時絕大の權力者であるローマ法王と國王を、其の向ふに廻して反抗した、あの雄々しさが有るかと疑はせる。然しながら一見細々とした彼の體には、明敏にして俊邁なる精神と、無限の精力と、無撓の剛愎と、不屈の鐵意を藏して居た。而して又た、眞に偉大なる人格から出て來る、人を惹き付ける魅力が、彼の淸淨なる生活と共に、彼の感化を博大深刻ならしめた。彼の宗教界の改革意見なるものは、凡て聖書を以て其の權威とした。聖書に反する一切の物は、たとひローマ法王の權と雖も、又た基督教會の傳統と雖も、寸毫も容赦しなかつた。斯くして彼は、變體說を否認し、免罪を否認し、免罪符を否認し、聖徒を祀る堂に參詣するを否認し、聖徒への禮拜を否認

した。卽ち總じて過去の一切の不合理なる傳統を破壞し、ローマ法王權の敎理に反對して、宗敎思想の自由を主張した。彼は『人は自ら破門するに非ざれば、何人もローマ法王より破門さるゝ事無し』と主張した。彼がバイブルを信仰の唯一の根據にする事と、何人も自ら聖書を研究すべしと云ふ事は、取も直さず、神と人との中間に介在する、全てのものを拒否するを意味する。斯くて法王權と傳統的基督敎會の敎理を、其根柢より覆さんとしたのである。彼は、彼の主張を糺明すべきにより、ローマ法王廳に出頭すべし、と云ふ命令を受けた時、彼の健康は其に應ずるを許さなかつた。彼は則ち書を裁して曰く『私は何人にでも私の信仰を告白する事を、常に喜びとする、殊に其をローマ法王に對して然りとする。何となれば若しも私の信仰にして正しくば、ローマ法王は其を確認すべく、若しも私の信仰にして正しからざれば、ローマ法王は其を匡すべしと思ふからである。

私は又た、ローマ法王は此の地上に於ける基督の最高の代表者として、萬民に超へて基督の福音を實踐すべきであると信ずるものである。實に基督の多くの使徒が、其の使徒たるを得しは、基督を模範とせるに依るものにして、單なる世俗的の顯榮に依るものではない。基督は、此の地上の生涯に於ては、萬民の中で最も貧しきものであつた。そして全ての世俗的の幸福を振り捨てたものであつた。此の事から考ふるにローマ法王は一切の世俗的の顯榮を俗界の人に讓り渡すと同時に、其の下々の僧侶をして、ローマ法王自らに倣はしむべきであると信ず』と。痛烈にローマ法王の權威に對して、堂々眞正面から挑戰した。彼は聖書を平易なる自國の通俗語、卽ち英語に飜譯して、何人にも聖書を讀み得る樣にし、又た通俗なる文章にて色々のパンフレットを書いて、四方に弘通せしめた。

何が故にウイックリーフは、或は追放せられ、或は禁錮せられ、又た或は身死

して後四十四年、ローマ法王の命令の下に、其の遺骸を掘り出されて、燒き捨てられ、其の灰をテームス河上の風に撒き散らされるに至るまでをも顧みず、斯くも大膽に痛烈に、宗教改革を叫び始めたか。其は實に、耶蘇の心を心として、其當時の宗教界と、社會狀態を觀る時、眞に義憤已むを得なかつたからであつた。今夫れ當時の狀勢を視よ。ローマ法王は神權を名として暴威を振ひ、大監督僧正等は、猥りに上位を擁して下民に傲り、國王は戰を好み、政府は稅を絞り、黑死病年毎に至り、人口は殆ど半減した、而かも當時の宗教界、當時の政治界、當時の上流社會には、誰一人として、此の下民の疾苦に同情して、身を殺し來る者が無かつた。吁、世は斯くてあるべきにあらず、今日吾人叫ばずんば何れの日にか叫ぶべき、今日預言者現れずんば何れの日にか現はるべき、我は十字架を負てゴルゴタに到らん、と云ふのが彼れウイックリーフの心膓であつた。斯くして彼は、

國王と法王とに逆つて、眞理の楯をつき始めたのである。法王は怒り、國王は憤り、彼は追放せられ、又た禁錮せられた。然しながら天下の大勢は如何ともする事が出來なかつた。ウイックリーフに謳歌する者が、日々に增加し、恰も後世ルーテルがウイッテンブルグに叫びたる時の如く、其の聲雷の如く聞え始め、大改革の勢は、潮の滿ち來るが如く、英國社會の各方面に澎湃として起つて來た。かくて彼に聽かんとする者、彼に附隨して事を擧げんとする者、四方より集り來り、其數幾千と云ふを知らなかつたが、ジョン・ポールも亦た來つて、ウイックリフーの門下に入つたのである。

ウィックリーフは己れに從ふ者の中から三四十名を選び、これを我國の禪僧の如く出で立たせ、其の昔耶蘇が七十人の弟子を放ち遣はしたる如く、彼等に金銀財布を持たしめず、到る處に乞食を爲さしめつゝ傳道の途に就かしめた。此等ウ

イツクリーフの徒は、踵にまで達する長き柿色の衣を着、手には杖を持ち、或は會堂に、或は葡萄畑に、或は辻の廣場に、或は街衢に、或は家に、庭でも遊び場でも、到る處、平易なる俗語を以て、村々や町々の人々に傳道して歩いた。彼等はもとより宗教的福音を説いて歩いた。然し又た社會の全面を改革するを主なる目的とするが故に、彼等は政府の失政を攻撃し、僧侶の腐敗を慨論し、特に當時著しかつた貴族富豪の驕奢に向て、滿腔の熱血を濺いで之を叱責して、更に容赦するところが無かつた。又た貧者無告の民の疾苦に對して、同情の念禁ずる能はず、欷歔流涕の音吐を洩して、之を懇諭慰藉した。彼等は管に説教演説に於てのみならず、又時としてはラングランドの如き詩を口誦して、恰も禪僧が經文を唱へつゝ往くが如くに往き、聽く者をして凄然忿然、天の一方を睨んで起たしめんとした。左れば其の勢燎原の火の如く、瞬く間に四方を席捲したのである。

ジョン・ボールは早くより既に、彼の生れ故郷ケントに於て、大膽猛烈に傳道を開始してゐた。彼はカンタベリー大僧正の激怒を買ひ、三度まで投獄せられ、又た破門せられた、而して又た、人々も彼の説教を聞く事を嚴重に禁止さるるに至つた。彼の傳道が如何に猛烈を極め、其の行動が如何に放膽であつたかは、之を以ても想像することが出來やう。然かも彼は、迫害に遭へば遭ふ程、困難を經れば經る程、彼の志は愈々堅く、彼の精神は愈々猛烈を加へた。恰も鐵が熱火を潛ぐる毎に、愈々其の精錬の度を高めるが如くであつた。彼の舌端から焰となつて迸り出づる言々句々は、實に當時の哀れなる農民に同情し、貴族、富豪、僧侶に對する憎惡に滿つるものであつた。今彼の説教の大要を云はゞ、

『諸君よ、聖書を繙て見るべし、路可傳に、「主の靈われに在す、故に貧しきものに福音を宣傳へんことを我に膏を沃ぎて任じ、心の傷めるものを醫し、又囚人に

釋されん事と、瞽者に見させん事とを示し、又壓制へらるゝ者を縱ち、主の禧ばしき年を宣べ播めんが爲めに我を遣はせり」とある、是れ卽ち基督が降世の使命にあらずや。然而して又馬太傳に、「人の子おのれの榮光をもて諸〳〵の聖使を率來るときは、その榮光の位に坐し、萬國の民をその前に集め、羊を牧者の綿羊と山羊とを別つが如く、彼等を別ち綿羊を其右に、山羊を其左に置べし云々」と云ふ、世の審判の條を見よ。その時神父に恵まれて、創世より以來備へられたる國を嗣ぎ、窮りなき生命に入るものは、わが此の兄弟の最微者に對して、その飢えし時に食はせ、その渴きし時に飲せ、その旅せし時に宿らせ、その裸なりし時に衣せ、その病みし時にみまひ、その獄に在りし時に就るものにあらずや、何となれは、わが此の兄弟の最微者の一人に行へるは、卽ち取りも直さず父なる神に行ひしものなればである。而して其の反對に、わが此の兄弟の最微者の一人に對して、其等の事を行はざるは、卽ち取りも直さず父なる神に行はざりしものにして、其等のものは惡魔と其使の爲に備へられたる熄えざる火に投げ入れられ窮りなき刑罰に入ると、記さるゝにあらずや。是れ又た人の子が賞罰せらるゝ標準にあらずや。敢て問ふ、今この最微者とは誰ぞ、卽ち今日の細民無告の民、其者にあらずや。汝基督を信ずるか、然らば何ぞ其誡を守らざる、汝天國に入らんことを冀ふか、然らば何ぞ其行あらざる、「壓制へらるゝ者を縱ち心の傷める者を醫す」是れ卽ち基督の使命、卽ち吾人基督信者の職分にあらずや。然るを汝は飢えたる者あるに食はせず、渴ける者あるに飲ませず、旅せしものを宿らせず、裸なるものに衣せず、猶且つ神の喜且つ忠なる僕たらんことを欲するや、看よ、滔々たる人世已に惡魔の領土と變じたるにあらずや、大僧正、大監督、否、大法王すら已にベルゼブルと變じたるにあらずや、何ぞ其他の末流を云はんや。

嗟呼蝮の裔よ、誰か汝に來らんとする怒を避くべきことを告げしや、然ば悔改に符ふ果を結べよ、今や斧を樹の根におかる、故に凡て善果を結ばざる樹は斫られて火に投げ入れらるべし。』と云々。

其說き起すや恰もバプテスマのヨハネの語氣にひとしく、其說き勸むるや、恰も基督の音調にひとしかつた。されば悔改めてジョン・ボールに就くもあり、又は反抗して却て彼を捕へんとするもあり、或は氣狂ひ說敎者と嗤けるもあり、いづれもさま〳〵にして其結果は一ならざりしも、而かも其力は近鄕近在を振撼して止まず、必ずや社會に非常なる一大激變をあたふべき前徵を示した。かくしてジョン・ボールは啻に此主義を聖書と敎理とにのみ訴へず、更に進んで人權に及び、同等論に入り、遂に同胞主義を主張して曰く

『嗚呼國家の良民よ、事物はかくてあるべきにあらず。奴隷と貴族、誰が此の區別を立てしや。奴隷、何故に奴隷たるべき。貴族、何故に貴族たるべき。一は額に汗して働き、一は袖手して遊び暮し、而して一は飢へ一は飽く、彼等の何の權利に由て斯くあるや、何の德に由て斯くあるや、吾人はいづれもアダム、エバより來りし同胞にあらずや。想ふ昔しアダムが耕し、エバが織りしとき、貴たり奴たるもの何れにありしや、彼等は如何にして其貴たるべき證據を擧げ得るや、其の心清きか、其魂高きか、其德厚きか、其惠博きか、吾人は彼等に於て之を觀ること能はず、然り彼等は何の權利を以て其位置に在るや、彼等は酒を飲み肉を食ひ、肥馬に乘り、長袖を垂れ、放奢淫逸維れ日も足らず、然而して吾等は水を飲み、糠を食ひ、襤褸を纏ひ、疲脚を曳き、猶且つ妻子を養ふこと能はず、只管彼等が驕奢の用にのみ供せられる。是れ果して如何なる理由ぞ、吾人は今日の社會に懷疑なからんと欲するも能はざるなり』と。云々。

二

かくて又ジョン・ボールは當に會堂に於て之を說くのみならず、野外若くは敎會の庭前、若くは又た墓地に於て之を說いた。ラングランドの詩に曰く、

『アヽ人よ、汝若し人類の同等なるを知らんと欲せば、よろしく墓地にゆいて之を看よ、柴の衣いづれにや在る、威張れる人物いづれにや在る。金銀いづれに在る。官爵いづれに在る。加之墓地を通じて彼方天の一方を看よや、乞食のラザロは却てアブラハムの懷に居り、傲り樂しみたる貴人は、却て火焰の中に惱みつゝあるにあらずや』

ジョン・ボールは頗る此詩を愛した。こゝを以て故らに墓地に於て說敎を爲すを好み、憤慨一番、或ひは聲を擧てラングランドの詩を歌ひ、或は此世の空を說き、或は來世の望を述べ、或は人情の大道を說き、或は社會の不公を訴へ、或は人類の改革の大義を唱へ、或は怒り、或は泣き、或は罵り、或は勸め、狂瀾說敎者と呼ばれ、乞食坊主と稱へらるゝをも意とせず、己が生國ケントを中心として、四方八面へ其叫び聲を揚げ始めた、そして人心遂に、大いに動き、爲めに三度投獄せられ、又た破門せられ、人々の彼の說敎を聞く事を嚴重に禁止せらるゝに至つた事は、前に述べた如くである。然れども其議論と精神の感化とは、毫も束縛せられなかつた。ラングランドの歌、乞食坊主の遊說、ウイックリーフの大論は、いづれも當時の大問題となり、ジョン・ボールに及んで、殆んど激烈の絕頂に達した。そして一三八一年の六月に及んで、人民の抑壓せられ來つた憤懣の情は、遂に炎々天に冲する焰となつて、爆發したのである。

一三七七年にエドワード三世死し、リチャード二世嗣で王となつた。リチャー

ド二世は、時に僅かに十二才の幼君であつた。エドワード三世在世の時には、流石に佛國と戰つて大いに勝ち、佛國の三分の一を割いて我領地となしたる程の折柄なれば、誰あつてか能く之に逆ふ者は無かつた。然れどもエドワード三世は死したし、新王は幼君である爲に、更に國民に重きを爲す能はぬ。加之佛國は此機に乘じて、我に失ひたる國土を恢復したるのみならず、却つて彼より襲ひ來つて、將に我海をも侵さんとするまでに至つた。政府の權力は漸く衰へ、人民の不平は日に高まりつゝあつた。然かも政府は猶ほ讓る事を爲さず、暴虎憑河の威を振つて、益々苛稅を課し、軍費を募り、兵員を徵し、內外共に武力を以て無理にも其權威の有らん限りを保持せんと欲し、遂に斷じて人頭稅をさへ徵收するの暴政を施いた。人民は嘗て涙を呑んで無法なる勞働者條例をさへ忍んで居た。勞働者條例とは、當時物價益々騰貴し、從前の傭給若くは小作料にては、到底衣食の見込立ち難きを以て、或は遠國に出で或は他方に往て、各々生業を取らんとすれば、則ち政府は條例を設けて他方に行くを禁じ、遠國に旅するを制し、賃金の額を定め、小作の法を立て、如何に不平を訴ふるも、如何に飢餓に頻するも、冷然見捨てゝ顧みず、暴に暴を重ね、壓に壓を積み、恰も牛馬を驅り立つるが如くに、人民を驅り立つる法律である。人民は泣き、斃れ、終に死に至るも、尙ほ且つ忍んで時を待つて居た、而して今や更に人頭稅を徵收せらるゝに至る、最早や之れ死活の問題である。遂に死を決して破裂したのである。

破裂の先鋒地はケントであつた。さればジョン・ボールの鼓吹其の他に優つて强かりし事を見るべきである。人頭稅の徵收官が來るや、かねて期したるケントの人民は、ソラと云ふので竹槍蓆旗を鏞へして集るもの怎ち幾千人、皆聲々に叫んで曰く『我等は天下の人民にして無罪の國民である、奴隸に非ず、牛馬に非

ず、我等は斯かる暴政に服するの義務無し、宮殿を視よ、貴族を視よ、金を鏤め、珠を聯ね、淫侈、逸樂、維れ日も足らず、而かも其人頭税を徵せらるゝに於ては、我等瀕死の人民と全く其額を等うする、之れ何たる怪事ぞ、何たる暴事ぞ、我等は最早や國民たるの權利を以て之を忍ぶ事能はぬ、是れ我等を陷阱に落し、之に加ふるに石を以てするもの、我等は最早や生を欲せず、寧ろ苛税者を獲て甘心するの他なし』と。卽ち群を爲して進み來つた。人頭税の徵收官は之を見るより逃げ出した。然し直ぐに屠られて仕舞つた。暴動は血を吮て益々猛く荒れ廻り、遂にロンドンに押し寄せ、國王リチャード二世に謁して、大いに談判する所有らんと揚言し、途に郡長を捕へ、郡役所を焚き、裁判所を襲ひ、牢獄を破り、かねて暴政の爲めに入牢し居たる者を縱ち、人民萬歲を唱へつゝ、遙かに押寄せて來た。又た之と同時に、エセッキスの地に於ても、ワット・タイラルなるもの人頭税の徵收官が己が娘を辱めたりと揚言しながら、また一揆の巨魁となつて、將にケントに應せんとするの勢を示した。その他、見る間にヨークシャイヤル、ランカシヤイヤル、サフオルク、デボン等を始めとし、凡そ東西南北より関を作つて合するもの其數數十萬、遂に社會大改革の一大軍隊は瞬く間に形成し、大河奔流の勢を以て、ロンドンへ〳〵と進軍した。

此の農民謀反の大軍の元帥となつたのは、ワット・タイラルである。嘗て英佛の戰爭にも從軍し、天晴勳功ある人である。その他ヂャック・シロル。ジャック・ストロウ等渾名された豪物が將となつて、總ての指揮操縱に從事した。然し又、歷史の傳ふる所によれば、例の乞食坊主が多く之に混じて、參謀ともなり、隊長ともなり、鼓舞激勵、又たよく之を嚮導した。されば幾十萬の軍勢も、道路暴を働く事なく、奪はず盜まず、規律正々堂々として進軍し、途にメイドストン牢獄

を過り、之に繋がれ居るジョン・ボールを援ひ出し、ジョン・ボール萬歳を三唱し、彼を誘ひつゝ、遂に國王リチャード二世と日を定めて、ロンドン市外の野に會ふ事となつた。

リチャード二世は此の時十六才の少年であつた。然るに此リチャード二世は、大膽にも雲霞の如き暴民に臨んで『予は汝等の王なるぞ、汝等は何を望むや』と叫んだ。一同は聲を擧げて曰く『我等は永久に、王が我等を自由なる者となさん事を望む、又我等の土地を解放せん事を望む、かくて我等は農奴と云はれ、農奴として束縛さるゝ事が、永久に無からん事を望む』と。『然らば予は汝等の願を聞屆くるぞ』と、速座に自由と大赦を人民に誓言し、各々安堵して國に歸るべしと命じた。此の日三十人以上の書記が終日解放令を書くに、汗みどろになつた。農民大衆は、王の餘りの速決に驚き、且つ歡呼して之に應じ、各々解放令を手にして解散の歸途に就いた。然し唯りタイラルのみは怪んで曰く、此者若年而かも膽力言語侮るべからず、我等は此上ともに、王が果して彼の誓言を實行するや否やを、監視せざるべからずとなし、なほも部下の手勢三萬を引具して、ロンドンに屯在した、そして其翌朝ロンドン市街にて、更に王とタイラルと面會した。タイラル進み出で、王も進み出でた。タイラルの手勢は環視し、王の侍衛も眼を張つて睨んで居た。王とタイラルと一言二語交はすかと見る間に、タイラルは手を劍に當て王の勒を掴んだ瞬間に、ロンドン市長ワルワオルスは劍を拔いて紫電一閃タイラルを斬り仆した。タイラルの勢は餘りの事に、『殺したぞ、殺したぞ、我等の大將を殺したぞ』と、喊聲を擧げて動搖した。其の時リチャード二世は大音を擧げて、馬上に踏張りつゝ、『人民よ、汝が大將とは誰ぞ、予は王なり主なり、汝の大將とは誰ぞ、予に從へ、予は汝の大將なるぞ』と怒鳴れば、タイラルの勢は氣を

呑まれて、屈服した。貴族は勢を得て馳せ加はり、その兵は忽ち十萬を以て數ふるに至つた、而して直ちに、先に許された解放令は取消されて仕舞つた。嗟乎、是れ果して如何なる最後ぞ。人民の哀訴は終に聞屆けられず、百萬の民衆は畢にリチャード二世に欺かれて了つたのである。然而して歴史の傳ふる所に依れば、此の時リチャード二世は、啻に人民を解散せしめたるを以て滿足せず、直ちに精兵四萬を將てケント、ヨセッキス、其他謀反したる地方を襲て之を征し、往く〳〵途々、『汝は奴隷なり、奴僕なり、何時までも奴隷たるべきものなり、然而してなほも我命令を聽かずんば、禍災は益々大なるものあらん』と揚言した。時にジョン・ボールは同僚グリンド・コッピと倶に、部下數千を率ゐてセントアルバンスに屯しつゝあつたが、之れ亦た王の破る所となり、遂に捕へられて相侶に絞罪にかゝつた。こゝにグリンド・コッピの辭世の言が有る。

『嗚呼予は今我獲たる自由の爲めに死す、予はかゝる殉死を遂げたる身を祝す、』と。『我獲たる自由の爲め』と。是れ果して如何なる意味ぞ。彼等は自由の爲めに働いた、彼等は自由の爲めに謀つた、彼等は自由の爲めに說敎した、而して彼等は遂に自由の爲めに旗を擧げた。然しながら其の結果は如何。王は益々怒り、暴は益々加はり而して彼等は終に空しく絞罪の刑に死んで往つた。然れば則ち其獲たるところは何物ぞ。加之歴史の傳ふる所によれば、此後王は益々壓抑を加へ、國會は貴族に由て制せられ、凡そ土民の子たるものは文學を習ふことを得ず、敎育を受くることを得ず、『學校へ登ることを得ず』との法令を、時の天下に布くまでに至り、『僧侶は其筋の許可なくしては說敎することを得ず、猥りに說敎するものあらば、直に牢獄に投ずべし』との嚴命を、全國の間に布くに至つたと云ふ。然らば則ち其獲るところ何物ぞ。啻に自由を得ざりしのみならず、愈々自由を失

ひたるにあらずや、グリンド・コッピ遂に狂したるか、然らざれば、其言の其事實と相違する、何んぞ夫れ此の如く甚しきやとは、是れ恐らく凡俗の疑ふ所であらう。然しながらミルトンは云ふ、『聖教徒の革命の如きは遂に得るところ無きに似て居る、卽ち空しく洪水の荒れたる如き感あるのみ、然れども達者は知り識者は悟す、看よ、此後必ず豐饒の地たらん』と。さればグリンド・コッピの如き、若くはジョン・ホールの如きは、何の得るところも無くして、空しく死んだものゝ如くであるが、今日に於て英國の社會改良家は、皆ラングランドは英國社會改良家の先鋒にして、ジョン・ボールの如きものは、卽ち英國社會改良家の魁たるものであると云ふ。若し夫れ往時英國にラングランドの如きもの、ジョン・ボールの如きものが、出でずとするならば、吾人は今日の英國を見る事能はぬであらう。若し夫れ往時に在つて人民が死を決して叫びたる人道の聲の大なるもの無かりしならば、英國の社會は今日の如く爾く下民に同情を表し、自由を與へ、同胞の感念を懷くこと深からぬであらう。英國の歷史家も皆筆を揃へて、たとひ其當時は一時反動の理法によつて、益々壓制に出でたりとは云へ、かの人民謀反の其後は、國王も漸〻恐怖を懷き、政府も漸く非を悟り、貴族も折れ兵士も讓り、下民同情の念勃然として社會に起り、訴へずして隷民の制度廢せられ、爭はずして暴政は止み、降て十五世紀の間に於ては、實に勞働社會の繁榮、下民の福祉、建國以來の絕頂に達するに至つたと、一樣に論じて居る。嗚呼グリンド・コッピは遂に空しくは死なゝかつた。彼等は正に、英國史上巨大なる子房の一擊を演じ果したものである。吾人は古を憶ひ今に顧みて、實に感慨無量のものがあるのである。

三　トマス・モール

ラングランドの哀れなる細民の歌、ジョン・ボールの激烈なる噴火山的演説は、端なくも、第十四世紀の人民大叛亂を惹起して、英國は其社會上一大變動を見るに至つた。從來主僕の關係たりし、地主と小作人との間も一變して、雇者と被雇者の關係となり、貧民が被らされし非道の壓制も次第に解け去り、第十五世紀は、所謂農民の黄金時代と唱えらるる程に至つた。然れど是れ彼のグリンド・コッピがボールと共に絞罪の刑に處せられんとするに際して、從容として「我れ勝てり」と喝破し、身は、一抹の灰燼と化し去りし悲慘事のありたる後、果して其言の如く遂に社會を化了し得たる、所謂志士仁人身を殺して道に殉せし結果に外ならなかつたのである。

ジョン・ボールの後、一百年、トマス・モール生る。蓋しモールの時代は、世界大變動の時代にして、新世界の發見、羅針盤の發明を始めとして、東洋には支那の航路新に開け、政治・經濟及び商工の事業にも、著しき變動を來し、近東に於ては、コンスタンチノープル陷落して、學者の逃遁と共に、希臘文學は歐羅巴に輸入せられ、世界の人心は方に激動の時代であつた。

蠶つて英國の社會の狀況を瞥見すれば、貧民黄金時代の太陽漸く傾きて、暗膽たる黑雲更らに其頭上を掩ひ始めんとして居た。先是英國に於ける羊毛製造の事業は、次第に繁昌して遂には外國輸出となり、莫大なる利益を占むるものあるを見るや、利益に親しみ易き地主等は、農業の利薄きを見て、其所有の耕地を擧げて之を牧場に變せんとした。於之乎英國は宛然たる一大羊毛製造場たるが如き觀を呈し、多數の農業者は、其耕すべき土地の乏しくなりしと共に、其職業漸

く閑を告ぐるに從つて、多數の遊民を生ずるに至つた。地主等は此機に乘じて賃銀を低下し、若かも勞役を增し、或者は主僕の關係を繫ぎて暴戾なる使役をなし、同胞貧民の窮乏生活を見るも、全く無關心なるに至つた。されど此の貧民に取つて傷むべき世の傾向は、愈々益々深刻を呈し來り、農民等は其職業を求むるため、農業を拋つて都市に入り込むもの、絡繹として、踵を接し數年ならずして空虛なる田舍と充滿せる都市を見むんとするの有樣なりければ、政府は逸早くも此の傾向を喰ひ止めんとして、新たに法律を發布し、農民の移動に向つて制裁を加ふるに到つた。是れ一國の主治者の見地よりして己むを得ざるの處置ならんも、農民に取つては寔に殘酷非道なる打擊にして、多數の農民等は殆ど進退維れ窮するの狀であつた。是れは之れトマス・モールが其五十餘年の骸軀を置きし當時の英國社會の狀態にして、彼れが感激奮勵、渾身の熱血を社會問題に灑ぎ、經營畫策遂に首足其所を異にして尙ほ已まざりし所以であつた。

トマス・モールは、一千四百七十八年英國ロンドンに生る、父ジョン・モールは高等法院の裁判官にして、「ナイト」爵であつたので、モールは倫敦の中央なるミルク街の父の居宅に生れた。幼にしてロンドン隨一の學校として名高き、聖アントニーの學校に學び、後「カンターベリー」の大監督ジョン・モルトンの膝下に送られて、此の大監督の敎育を受けたのである。

吾人をして玆に少しく、此の鳳雛麟兒が育くまれたる偉人に付て語る所あらしめよ。蓋し後年トマス・モールが社會の活舞臺に立ち、實際問題の演奏者となり、侃々の言、愕々の行、痛絕快絕の運動に從事せしも、其思想行爲の多くは、此偉大なる大監督ジョン・モルトンの薰陶感化に依るもの少なからざるが故である。

モルトンは、オックスフォード在學中、夙に政治的伎倆に加ふるに、宗敎的誠實

斯人出でよ

を以て名あり。博聞强記にして、一千四百七十九年卽ちトマス・モール誕生の翌年には、早く旣にイリーの監督となつた。然るに事あつてリチヤルド王三世の爲めに幽閉せられたりしが、後釋されてバッキムガム侯の監視の下に置かれしも、王リチヤルドに取つては、彼は侮るべからざる强敵であつた。されば王リチヤルドは其危險を避けんが爲め、彼を移してフランダアに置いた。旣にしてヘンリー七世位に卽くに及び、擢でゝ彼に「ロード・チャンセル」の高位を授け、更らに「カンターベリー」の大監督となし、優遇厚待至らざる所なかつた、而して彼は學者として、法律家として、牧師として、天稟と修養と二つながらに卓越せる特技を現はし、王ヘンリーの最も信賴せる顧問となつた。彼れ身躰肥滿ならずと雖も、しかも瘦癯せず、魁偉ならすと雖ども、しかも矮矩ならず、清秀眉目年と共に衰へず、其平常談話の如き、いと平易にして、然かも莊重謹嚴の態あり、一見人を

して敬意を禁ずる能はざらしむるものがあつた。

トマス・モールが此偉人の膝下に送られしは、十五才の時にして、爾來十九の齡を重ぬる迄、朝夕此偉人に親炙して其薰陶を受けたのである。モルトン僧正は、モールの擧止凡常に非ざるを見て曰く、此兒必ず名を成さん、我今歲七十、老ひて彼の名を聞く能はざらんも、生き殘るべき多くの人は、其高名を聞くを得べけん、此兒必竟凡庸兒に非ずと。以て老大の偉人モルトンが、如何にモールを親愛し、敎導敎育、己れの主義理想を、此少年に鼓吹せしかを知るべきである。

モール十九才の時、モルトン彼をオックスフォードの大學に送る、當時オックスフォードに、知名の希臘學者が三人あつた、曰くライネクル・グロシン・コレットである。就中コレットは其智識の該博、人物の偉大を以て秀逸の聞高かつた、彼は希臘語を以て聖書を其源頭に溯つて研究し、煩瑣哲學派を排すると共に、自

由信仰を唱道し、直ちに當時天主教の暴戾なる信仰的束縛を憤り、信仰は聖經と使徒信經にて足れりとの事を痛論した。彼の宗教改革の曉星ルーテルの師友たるエラスモスは、此コレットの弟子であつた。トマス・モール又此の偉人の感化を受け、此の偉人よりプラトンを學び、其之れを尊崇するの極、同門エラスモスと共にコレットを呼んで、今プラトンを稱するに至つた。

モールのオックスフォードに在るや、コレットより自由宗教の大主義を學ぶと共に、亦社會主義を學び、プラトンの所謂理想的社會を欣んで置かず、既に學窓を出でて活社會に立つや、專ら基督教の人情的側面を唱道し、其「貧しきものは福音を聞かせらる」云々、もしくは「此の最微者の一人になすは、卽ち我になすなり」などの聖語は、彼に取つて九鼎大呂より重きを感せしめたものであつた。蓋し現今の基督教は、殆ど社會主義と同一の傾向を有し居れども、當時に在つては、其最も華奢を極めしものは僧侶にして、すべての壓制の源は法王であつた。其皇室神權を唱へて下民を壓制する、實に其極に達して居た時であつた。爲にコレットの社會的基督教が、如何にモールの年若き慈善心と、公共心を鼓勵したりしかは、推知するに難くない。斯てトマス・モールは、コレットより其社會主義を學んで、社會の改革に從事したるは、恰もルーテルがエラスモスより自由宗教を學んで、宗教改革の撞鐘者となりしに同じ。兎に角此二人物が、如何に天下百世に影響する所少からざりしかを察知すべきである。

トマス・モールは、剛腸、鐵骨毫も威嚴に屈せざる丈夫兒であつた。これによつて、人或は彼を目して儼然たる英雄の如く思惟するものあらんも、實は然らず。其心膽こそしかありしならんも、其容貌外表は、寧ろ人の意想の外に出るものがあつた。コレット曾て戲れて曰く、英國中に唯一人の滑稽家あり。トマス・モー

ル卽ち是なりと。エラスモス曾て彼を評して曰く、彼は實に愛嬌と快活の化身である、幸福なる哉モールよと、彼一日クリスマスの祝祭式に臨んだ時、偶〻滑稽芝居を演ずるものありしが、モール之を見て忽嘻々として飛入りをなし、其役者の一人となり、縱横自在に臨機の役目を演じたりと言ふ、又以て其人となりを見るべしである。然れども彼が一旦毅然として起つや、疾風の如く、怒濤の如く、秋霜烈日、凛として犯すべからず、所謂威武不能屈、貧賤不能移的の剛腸鐵心の快男子たる事は、彼の行動又之を證して餘あるものであつた。

モール廿一才の時、友人エラスモスは佛蘭西に去り、己れはロンドンに歸り、靜かに法律の勉强を始めた。蓋しモルトンより受けたる政治思想、及びコレットより得たる社會主義を、天下に實行せんには、是非共法律を研究し、身を政治界に投じて、國會に入る必要を感じたからである。彼れが俊才と快活は幾許もなく人望を得て、ロンドン市の副法官となり、當時早く既に國會議員となつた。之れ彼れが其偉大なる精神、卓越せる識見を表はす好個の機會にして、折りしも有名なる事件、卽ちヘンリー七世が、其女マアガレットをスコットランドのゼイムスに嫁せしむるに付き、莫大の費用を國會に請求したる時にして、彼れは先登第一に、而かも事の終局に至る迄、斷として敢て國王に反對し、議會をして其請求を拒絶せしめた。而してこれ實に二十二才なる白面書年トマス・モールの偉効であつた。さればヘンリー王は大に怒り且つ愕いて曰く、無髯の卑賤兒、大王を失望せしめたりと。王遂に餘憤をモールの父に移して、幾多の口實を設けて之を苦めければ、モール亦禍の其身に及ばん事を慮り、遂に國會を去つたのである。モール以謂らく、我れ一身を捧げて社會の改良、國民の教育に從事し、猛烈なる運動を試むるも、寧ろ反對の氣焰を高むるのみ、已矣如かず身を閑靜なる寺院

に投じて、夙夕嗜好する所の宗教社會の人たらんにはと、感慨胸中に往來するの際、偶々先師コレット等オックスフォードを去つてロンドンに來るに逢ひ、靜かに其意を語りしに、當時コレットは、心既に寺院の弊害を熟知し居たりければ、モールに勸めて、寺院に入り僧となる事の不可なるを告げ、且つ曰く速に妻を娶り家庭を作りて、法律家となり、他日の好機を待つべしと、モール卽ち其言に從ひぬ。折りしも同門の友エラスモス再び英國に來り、ライネクル。グロシン。コレットの三人も亦ロンドンに在り、師友相會して日に政治、社會、宗教其他の事を談論し、將來執るべき方針をも打合せ、彼の一生の事業、此間に定まつたるものの樣である。

思ふにモールが一生の中、此ロンドンの住居中程、愉快なるものは稀なりしなるべし。既にして、辯護士の業も次第に繁昌し、聲名漸く高なりければ、彼は益々奮勵して鰥寡、孤獨、貧民の爲めには、報酬を受けずして辯護の勞を取りなどして、聲名愈々揚るに至つた。

後ヘンリー七世死して、八世位に上つた。當時モールの知己朋友も多く用ひられて朝に在し故を以て、其感化勢力實に滿朝に及んだ。ヘンリー八世齡尙ほ長せずと雖も、資性快活且大慮あり。特に慈悲の志深く、人に接して城廓を設けず、傍人見て以て新文學の朋友となせり、オックスフォードの學生等は、特に彼に矚目して望を其將來に置けり。既にしてコレットはヘンリー八世の爲めに、聖保羅の首牧師及び宮庭の說敎者となり、トマス・モールは再び用ひられて、ロンドンの副法官となつて、朝廷に入つた、エラスモスは當時ローマに在りしが、呼戻されてケンブリッヂの敎授となつた。かくてヘンリー八世の時宇は、非常なる文化進歩の榮光時代として見えたれども、實は是れ寧ろ空虛の時代であつた。

彼は多くの壯年者の免れ難き未熟の血氣に激せられて、甚だしき戰爭好となれり。彼はグイネの王位に昔時の要求を提起して、俄然佛蘭西領を襲ひ、之を初として、或は西班牙に攻入り、其他各地に戰を構へ、貧民塗炭の苦を自家好奇心の犧牲に供して、非常の軍費を人民の膏血より搾取した。當時トマス・モールは愈々用ひられて、王ヘンリー八世の顧問となり、コレット亦大に王に用ひられしが、共に王の亡狀極まれるを見て、コレットは王の意に反對して說敎し、モール亦身を以て直諫硬議し、遂に骸骨を請ふて曰く、予は第一に神に盡し、而して後王に盡さん事を願ふと、瓢然去つて野に下つた。

モール既に王朝を退き、以謂く斯る虛榮粗暴なる時代の下に心身を捧げて、實際の運動に從事するも、事總て水泡のみと。夫より意を潛めて靜にプラトンより學びたる摸型に從ひ、一大理想の社會を畫きて、畢世の大著述に從うた、有名なる「ユートピヤ」卽ち是なり。

トマス・モール、ヘンリー八世の爲めに使して墺太利に留まる時、當時有名なるピータル・ギルスと交を結び居りしが、一日途上にギルスに會ふた、其時ギルス一人の老人を伴つて居つた、其容貌魁偉俊峭、眼光電の如く、一見して其鍊膽鐵の如きを見る、モール怪んで之を瞻め居りしに、ギルス卽ち彼を紹介して曰く、之は是れ新世界の發見者たる有名なるアメリカス・ヴエスプシユアスに從がひ、四回迄世界を週遊したる人にして、其名をラフアイル・ヒスロデと云ふ、君請ふ交を結べ、必ず大に得る所あらんと。トマス・モール之を聽きて大に悅び、與に己の家に伴ひ歸り、以て其談話を聽く「ユートピヤ」物語は、斯くの如くして其端緒をひらいたのである。

ラフアイル先づ口を開きて曰く、我れ天下を經巡ぐりて廣く人類の社會を觀來

りしが、未だ「ユートピヤ」より榮且幸なるものはない。我れ曾て英國に遊び有名なる大監督モルトンと共に交り、其家に食したる事ありしが、當時一人の客あり、英國の裁判の果斷を誇つて曰く、昨日一時に二十人の盜賊を一絞臺に懸けて殺せり、何等の心地好さぞと。此時我以謂く、嗚呼之れ何たる誇ぞ、盜むもの必ずしも惡人に非ず、判くもの必ずしも善人に非ず、今夫れ貴族豪奢を極めて、民塗炭に苦み、富者淫樂に肥えて、下民勞働に癯せ、甚だしきに至りては、身飢渴に頻して飲食を得るに所なく、生きんか盜せざるを得ず、盜せざらんか死せざるを得ず。於是乎已むなく眼を轉じて遂に富者の餘まれるものを盜まんとす、其狀寧ろ憐むべきものあるに非ずや、盜人必ずしも盜ならず、彼の富者若しくは貴族の如きは、所謂天下の富を盜み、細民の勞力を盜み、而して自ら奢るもの、我れ其盜人の誰たるを辨ずる能はずと。斯くて又一大息を發して曰く、今也英國の狀態を觀るに、彼柔和なる綿羊も、見る〳〵變じて猛獸となり、將さに農田を屠り、農民を喰ひ、盡く人民の生血を吮はんとす、帝王始め貴族も、僧侶も、盡く皆私利に迷ひ、農民の流離顚沛するを省みず、道路餓莩を橫へるをも意に介せず、將さに身自らをのみ利せんとす、何たる慘狀ぞ、何たる殘忍ぞ、我れ彼のユートピヤに往て之を見るに、正に別天地の開くるを覺ふ、ユートピヤには懶けて奢るものなく、働て癯せるものなく、鬼なく亡者なく、各々皆勞力を共分し、財產を共有す、家々各々若干の田園を備へ、人々皆出でて勞働す、果物實り、植物茂り、花亦爛漫として其間に匂ふ、彼れ他邦の如きは、遊ぶものは終日遊び、働くものは終日働き、田園を耕すものは襤褸を纏ひ、袖手して食ふものは錦繡を裝ふ、何たる不公ぞ、何たる怪狀ぞ。此のユートピヤの如きは則ち否らず、個々均しく額に汗して働くが故に、勞働時間六時にて事足れり、而して其他は敎育に

從事し、宗教に從事し、獨り活天活地を樂しむ事を得るのである、一人として飢ゆるものなく、一人として凍ゆるものなし、互に喜憂を別ち、互に友情を繫ぎ、四海同胞の實乃ち擧がる。我れ彼の滔々たる幾多の社會を見るに一方には倉廩充ちて、米粟腐さるにも拘らず、一方には粥湯をさへ啜る能はず、空しく天を仰で餓死するもの多し。貴族、銀行家、金工商、彼れ何物ぞ、更に生産的の業務なく而かも富豪を以て民に臨み、己のが富豪の源泉たる彼れ勞働人を省みず、之を虐し、之を縊し、悉く其血を吸盡せずんば已まず。斯くて彼等の爲めに財を殖し、彼等の爲めに衣食を供する彼れ勞働者の狀態を見るに、其殘たり酷たる、牛馬より甚だし、牛馬には明日の心配なし、彼れ人たり心あり、明日を思ふて寢ぬる能はず、今日の衣食すら給する能はず、何ぞ老後を思ふに遑あらんや。强壯の時だも餓死を免れず、何ぞ病時を思ふに暇あらんや。今の政府は富者の兇謀者より成る、其法律は細民の血を絞る工夫に供し、絞ぼり得て斃るれば則ち溝壑に捨つ、然ども今此ユートピヤの狀態を見るに、盜人なく、喧嘩なく、人殺しなく、紛爭なし、何となれば、人に慾を恣にする必要なければなり、妻に泣言なく、子を敎育するの心配なし、何となれば衣食の道具はり、社會敎育の門開らくればなり云々と。

此外ラファイルの語る處、或は結婚談あり、或は裁判談あり、兵事談あり、法律談あり。然れども歸する所は、皆平等の幸福に基づき、所謂少數者の嗜慾に任せざる社會に非ざるを論じ、屍位、素餐、徒食、怠惰にして、若かも貴族若くは富豪の名を貪り居る者の、不正、不義、不埒至極なる事態を說き、今日に在りて之れを言はば所謂資本家を詰りて民衆に同情を表したる結果に非るはない。ミル。スペンセルの社會主義、若しくはカールマルクス。ラザレの議論の如きも、悉

く其論點を「ユートピヤ」の此夢物語に歸せざるはない、當時にありては是れ實に夢のみ、空想のみであつた。されど僅かに三世紀を隔つる二十世紀の今日に至つては、最早夢にもあらず、空想にもあらず、著々として社會の實勢となり來つて居るではないか。大人の眼光百世を貫くとは、蓋し此等の謂なるべし。現今社會主義を唱ふる人「ユートピヤ」を稱して、近世社會主義的第一の紀念物と呼び、エラスモスが自由宗教の開祖となれりしが如く、モールを稱して近世社會主義の開祖と云ふも、誠に偶然にあらざるを知るべしである。

ユートピヤを著して後、其詳かなる消息を知らずと雖も、ヘンリー八世再び彼を召してナイトの爵を授け、祕密顧問の一員として或は外國に使して大使たらしめ、後議會一流の演說者ともなりて、非常なる聲望を博したりしが、僧正ンオルシーの要求金額が議會の議題に上るや、モール主として之れに反抗したるの故を以て、ウオルシーの嫉妬を受け、更らに反對黨より攻擊罵詈を被むりしが、ヘンリー八世の寵衰へず、却てウオルシーは辭職を命ぜられ、モールを拔んでて「ロードチャンセル」に昇任せしめし程にして、モール其榮職に在ること四年、聲名榮譽實に其絕頂に達し、彼の一生中最も榮光ある時なりき。然れどもモールは、由來剛直不屈の偉丈夫なりければ、志處と共に移り、媚を權門に呈するが如きに至つては、彼の頸骨餘りに强く、其侃々諤々として不正不義を喝破し、敢て或は一歩を假借せず、直進直行、毫も左右を顧慮せざりし故を以て、遂に王ヘンリー八世と一大衝突を現出するの不幸を見るに至つた。蓋し是れヘンリー八世が一時の獸慾に驅られ、大英國典に一大汚點を留むる事をも顧みず、其妻アレゴンのキャザリンを離婚して、妻の腰元アンネ・ボレンを娶らんとしたる事件に基因した者である。モールは此事を見て、怒髮冠を衝き、蹶然立つて王と爭ひ、遂に

辭表を提出して野に下つた。モールの官を去るや、家貧にして洗ふが如く、屢々飢渴の急をさへ見るに至つた、吁昨は堂々たる「ロードチャンセル」にして威權赫々、飛鳥を下せしモールも、今は飢渴交々瀕して、人の之を顧みるものなき一市人とはなり果てた。世事の轉變怪しむに足るものなしと雖も、古今英雄偉人の時に遇はず、鵬翼徒らに垂れて藩籬の間に翺翔するもの慷又慨すべきことである。されど之れ寧ろモールに取つては、彼れが眞正の價値の發現する機會にして、千紅萬紫燦爛たるの時であつた。當時モールの所得は、一年に百磅に過ぎず、大會の僧等之を見るに忍びず、千磅の贈金をなし、以て其急を救はんとせしも、モール固く辭してうけず、居をテームス河畔の一小屋に移して、坦然家庭の團欒を樂んだ。咄今日の高位高官の徒、賞錄榮名其極に達して尚ほ飽き足らず、不義の財を貪つて別莊を營み、貨殖に汲々之れ日も足らず、醉花吟月、美酒佳肴、しかも衣薄く、食足らざる貧民を忘れて顧みず、官職高位を以て一種の貨殖場となすの徒、汝人心ある乎。紙背に徹する汝の眼光を開いて、世界歷史の榮冠たり、人類の精華たる古今偉人士の去就進退を瞥見せよ、慚死せざるもの果して幾許かある。

モールがテームス河畔に於ける詫住居は、寧ろ閑靜幸福なる生涯にして、彼も其家族も、日夜に打解けて團欒の娛樂を取つた。されど此幸福なる家族も、日ならずして暴風狂雨に吹荒されんとする時は、近づいて居つたのである。蓋し偉大なる人物は如何なる時、如何なる場所に、如何なる生活を爲すも、其偉大なる性格を消盡するものにあらずして、假令其身に襤褸を纏ひ、陋居屈蟄の狀を爲すも猶ほ巍乎たる大山の巍然として聳ゆるが如く、彼が敵者は一日も安居して看過すべからざるものがあるからである。されば王ヘンリー八世を始め、其一味の徒黨

は、常に鴟梟が夜鳥を狙ふが如く、靜平幸福なる彼の家庭に、狂嵐を吹き入れんとするの機を窺つて居つた。於之乎モールは、或時は奸惡卑劣なる彼等の陰謀にかかり、收賂の嫌疑を受けて起訴せられ、樞密顧問の裁判を受けたが、元より無根の誣訴なれば、間もなく釋されて家に歸つたこともあり、又或時は反對の徒黨が尙ほも其陰惡を恣にし、モールを誣ゆるに叛逆陰謀の企をなすものとして起訴せしが、是亦罪とならずして釋されたこともある。されば陰險陋劣なる彼等は、さながら狂するが如く、奸策百出、陰謀又陰謀、遂に王の結婚上の問題を提起して、モールを罪に陷さんとせしが、世は如何に混亂して刈菰の如くなると雖も、白を以て遂に黑となす能はず、程なく釋されて又家に歸つた。此時一友あり、モールに來り親切に告げて曰く、我が友モールよ、王に逆ふ事を緩ふせよ、汝は强て王に逆ふ事の歸結、終に如何を知るなるべしと。モール直ちに答へて曰く、歸結とは如何、夫れ死乎、死は萬人の免れ難き所、汝も死し、我も死し、而して王も死なむ。我れ今死するとも、聊か死時に前後あるのみ、又意とするに足らざるなりと。又モールの娘は、父の歸るを見て大に喜びて曰く、父よ如何に嬉しき事にてあるよ、無罪者は遂に有罪者となる能ずして、安然歸り來りし事の如何に嬉しき事にてあるよと云ひし時、モール答て曰く、否とよ今は只少しく時間の延びしのみ、見よ必ず逃るべからざる運命は、我頭上に遠からずして落來らんと、果せるかな、新なる問題は、排モール一味の徒黨に依て企劃せられたり、卽ち王を敎會の頭となすべき事を誓へよとの、暴慢非道なる命令の作爲是なり。されど此命令も尙彼の卓犖硬直なるモールの頭を屈せしむるに足らず、モールは斷然として之を拒んだ。玆に於て反對黨は屈竟なる口實を得たりとなし、直ちにモールを入牢せしめ、一年の後儀式計りの裁判を經て、直ちに斷頭臺上に上せられ、無斬や

彼の快活なる性格と、彼の落々たる心魂を宿せし彼の躰も、首足其處を異にせられて、其首はロンドン橋上に晒さるるに至つた。時に一千五百三十五年七月七日。享年五十七歳。彼れ斷頭臺に上らんとする時、靜かに群集に向つて、予は聖公會の信仰の爲に死するものなる事を記憶せよと揚言し、言終りて跪いて祈り更に斬首者に向つて、確として汝の務を完うせよ、我頸短し、頸を斬り誤て汝の名譽を損する勿れと云ひ、斯くて從容自若として神人モールは此世を去つた。

叙し去り叙し來りて、彼れの生涯の一斑を最も簡單に略述した、吾人は今回顧して、彼の一生を默想玩味して、之れが所感を詳說するの遑を有せずと雖も、請ふ最後の一言を陳せしめよ。

モールの生涯が、後世彼の傳を讀む者に與ふる教訓は、蓋し一にして足らざるべしと雖も、青年者が其師友より感化を受くる事の甚だ緊要なる事を證するもの

の彼の生涯ほど好個の立證者を爲すものは稀であらう。彼れも天賦の稟性に於て確かに凡庸者流に勝るものありしとは曰へ、若しもモルトンより、深遠なる政治思想と熱切なる愛國愛民の情を受け、又コレットより博愛正義を基とする宗教社會主義を學ぶに非ざりせば、或は造詣の此に至らざるものありしならんも知るべからずである。其彼れが最も嗜好の傾向を有したる、脫俗超凡の僧侶生活を送らずして、力めて實際の社會政治の運動に其身を犧牲にし、心事皎潔、日月天に懸るが如きものありしに至つては、其今日の爲政者を愧死せしむべきもの一にして足らず、若し夫れ慷慨の氣激すと雖も、しかも快活活潑の性を失はず、溫容親しむべく愛すべきものあつて、しかも毅然卓然犯すべからざるの精神を備へ、樂天家にして、しかも世を憤るの大不平を抱き、百世を洞觀して其改善の策を萬世に垂れ、悠々迫らざる大度量に至つては、現下濟世家のよろしく學ぶべきの品

斯人出でよ
性であらねばならぬ。

四、ジョン・ウエスレー

1791
1703
88

一

ジョン・ウエスレーは一七〇三年六月十七日に生れ、一七九一年三月二日に死んだ。彼は最後の説教を、二月二十三日にレザーヘッドなるベルソン氏の宅で爲し、その翌日ウキルバル・フォースに手紙を書いて、奴隷賣買禁止運動を激勵し、三月二日に永眠し遺骸は數日間シチーロードなる教會堂に安置せられたのである。實にウエスレーの八十九年の長い生涯は、終始一貫して、宗教改革と社會改良の爲めに、捧げられた生涯であつた。

一治一亂は世の常とは云ひながら、ウエスレーの生れたる時代、卽ち十八世紀

初頭の英國史を繙く者は、クロムウエル死して未だ五十年ならざるに、英國の社會の壓制と、腐敗と、靡亂とが、斯くまでに甚しくなれるものかと驚かざる者は無からう。クロムウエル起つゝ、宗教的政治の大改革を行ひ、宗教の自由と、政治の自由を確保したるが如く見えしも、其の極終に自由の壓制に流れたる結果、一度クロムウエルの死するや、その大反動が起り來り、ウエスレーの生れた比ひ、卽ち十八世紀の初頭には、國教が又々大壓制を極め始め、天主教徒の如きは、國會議員たるは勿論の事、選擧權さへ有する能はず、五磅以上の馬をも、買ふ事を禁ぜられた。同じく新教徒と云ふも、國教徒に非る者は、其結婚式は必ず國教の僧侶に依賴せざる可からず、葬式も國教の式に依らざれば葬る事が出來ない。其の他壓虐は益々甚しく、遂には國教信者に非ずんば人として扱はれざるに至つた。政治も亦然りで、國會は殆んど蹂躙せられて、官吏は横暴を逞くし、人民の壓虐せらるゝ事益々甚しく、ピューリタンの自由の精神は、盡く英國の地を掃ふに至つた。例へば、海軍兵を募る如き、誰にてもあれ、丈高く筋骨逞しく、苟くも海軍兵に適したる者あれば、直ちに捕へて、否應なしに、其の苦役に從事せしめた。子供が戯れに、ウエストミンスターの聖橋を削つたと云つて警官は之を捕へて直ちに之を絞罪に處した。又た禁斷の場所に兎を捕へたる者も、直ちに死刑に處した。又た形を變じて公道に遊びたる者も、五志の物を盜みたる者も絞罪に處せられた。以て當時の暴政を見る可きである。若し夫れ宗教道德の方面を述べんか、淫風は上流社會を吹き靡けて、醜行亦掩ふ可くもない。ジョーヂ一世幷に二世の如きは、其正當なる妃皇を顧みずして、晝夜酒色に耽り、滿宮美女を蓄へ、淫婪至らざるところなく所謂『小犬隔レ花徒吠レ影』の狀況、宛然として英國の王宮に行はれた。また皇族、華族、貴顯、紳士、孰れも皆奢侈

逸樂を極め、人民の塗炭に困しむ者あるも、更に顧みる所がない。されば、上の好む所下之れよりも甚しきものありで、民間に在りても、少しく富み且つ力ある者は、靡然として風をなし、風俗壞頽惰氣瀰國、昔時ピューリタンの面目更に其國に存する無きに至つた。博奕の如きに對しては、當時の大審院長のクニオン其の處置に苦しみ、假令華族紳士の夫人と雖も、不法の博奕をなすに於ては、之を頸桎に處すべしと嚇かしても、更に其效果なく、遂にバッキンガム、シャイアル公爵夫人、其他二名の貴婦人に、賭博罪の爲め、五十磅の罰金を科せしむるに至つた。然し此の上下崩れかゝりたる大勢は、亦奈何ともする能はず、我國で云ふならば、大臣、大官、局長、其他豪商、紳士の如きは、毎夜順番を以て賭博を始め、深更三時若しくは四時頃に至ること、屢々であつた。斯くて此時に於て、僧侶は何を爲しつゝありしか、所謂る鹽其味を失ひ、何れも此等不品行、不道德、

不義の下に平伏し、時のカンタベリー大僧正をして、『吁何たる痛嘆事ぞ、今の僧侶は、盡く皆太鼓持と化し去り、上權門に媚び、下人民に諛ひ、結婚埋葬の綱頭をのみ之れ思ひ、堂々たる貴顯のチャプレンたるべきものすら、常に裏口より這上りて女中の相手となり、巧言令色唯其主人の氣に入らんことのみ之れ力め、常に臺所に在つて食事をなし、座敷に出でゝ酒に醉ふたる主人の對手をなし、醉倒れて神を瀆す言葉を吐きつゝある主人の手を引きて、之を寢所に導くを以て、吾が務了れりとなす、かくて底止する所あるを知らずんば、英國は夫れ遂に滅びんか』と謂はしむるに至つた。將た亦此にマホークスなる奇怪なる亂暴會が、貴族の惡少年の間に起るあつて、夜々往來に出て、婦人を見出す毎に之を辱しめ、若しくは傷くるを以て、其樂としても、之を妨ぐるものが無かつた。有名なるワルポールは、一七五〇年に『今日の旅行は、晝行も尙戰場に赴く覺悟あらざる

べからず』と叫んで居る。蓋し之れ道路頽廢し、白晝に追剝出で、自衞の劍戟を携ふるにあらざれば、其危險なるを云ふたのである。吁、是れ何たる社會ぞ。眞にカンタベリー大僧正の曰へる如く、斯くて止まずんば、英國の亡びたらんや、必せりであつた。

此の時に當つて、英國に二人の偉大なる人物が、時を同ふして、政治界と、宗教界に現はれ來つた。卽ちウイリアム・ピットと、ジョン・ウエスレーである。今夫れ當時の頽廢せる英國の政治界を觀よ。最も其の靡亂せしは、ジョーヂ一世よりジョーヂ二世の半期に至る凡そ二十一年間、ホイッグ黨を支持して政權を握りたるワルポールの時代である。彼ワルポールは如何なる人ぞ。彼は彼の父を語りて曰く『我父は常に予に酒を强ひ、予一杯飲むときは、汝須く二杯を飲むべし、予は我子が素面にて其父の泥醉し居るを見るを好まず、と云ひしこと有り』

と。卽ちワルポールは、かくの如き父の子であつた。彼は選擧の時には、金錢を撒いて御用議員を製造し、敵黨中に於て硬骨の聞えある者には、種々の名義を附して、之れに利を啗はせ、所謂る買收を事としたれば、『各議員は皆定價附なり』と云ふ諺さへ起るに至つた。此の時に當つてや、內は勿論の事、外に於ては、北米に於ても、東印度に於ても、將た大陸に於ても、兵は敗れ、貿易は妨げられ、殖民地は奪はれ、悉く此れ失敗の歷史にして、英國古來の威信は蕩として消滅せんとした。ピット此の間に崛起して、愛國黨を組織して、此の不埒なる政界を詈り、至誠を擢して叱咤するや、國民の醉夢は俄然として覺醒し、政治界の面目を一新すると共に、國威又た發揚し、北米の野を殆んど復し、東印度の大領地、此の時に其門戶を開き、大陸に於ては、普國のフレデリックと共に其勢力を擧げ、英國をして更にクロムウエル時代に同らしめた。ピットが政治界に驚天動地

の大活躍をなして、英國の政治界の面目を一新せしめたと同時に、ウエスレーは宗教界の大刷新を爲し政治界と宗教界と兩々相待つて、當時の英國社會を振作した事は、實に今古の一大偉觀であつた。斯くて此の英國と此の大西洋を距てた米大陸に在つては、フランクリン出で、ワシントン現れ、北米合衆國の獨立を成就したのであるが、之等を今日より綿想し來ると、當時のアングロ・サキソン民族が、各所に於て大勃興を遂げたるの狀、燦然として眼底に映じ、壯快此の上なく覺ゆ。

さてもジョン・ウエスレーは、英國の北部リンコルン州のエップウオルスと云ふ所に生れた。此のエップウオルスは、周圍皆河にして、一箇獨立の島を成して居る。此處は其地の異なる如くに、人民も亦其質を異にして、純朴、敬虔、愛國至誠の情其間に溢れ、當時の英國の頽風も、遂に此聖地を犯す事が出來なかつた。父はサミユエル・ウエスレーと云ひ、母はスザンナ・ウエスレーと云ひ、父は敬虔なる牧師であり、母も亦た信仰厚く、慈母の情濃かなる女性であつた。一體に篤實親切にして信仰厚きは、ウエスレー家に傳統したる特性であつた。此の父と母の間に十九人の兒女あり、其の中八人は未だ幼くして世を去つた。そしてジョン・ウエスレーは第十五子であり、後年此兄ジョンと共に手を携えて、宗教大運動に終始したチャーレス・ウエスレーは、第十八子である。ウエスレー家は富裕と云ふ程の家庭ではなかつたが、世にも稀なる清淨にして溫かく、平和なる家庭にして、其の子弟は世に清潔あるを知つて不潔あるを知らず、誠實あるを知つて不義あるを知らずに、父母の慈愛の下に育てられた。殊にジョンとチャレスは、信仰厚き母の膝下に育てられた。母は一週に一夜は、必ず此の二人の子供に對して基督教の義務と、希望と、其の道に就いて、懇ろに教訓を施した。され

ば此ウエスレーは、十一歳の曉までは、殆んど天の使の如くに育てられ、世の汚れと云ふものを知らずに、幸福なる幼年時代を過したが、折しもバッキンハム公の命に依り、其兄弟と父母の許を去り、ロンドン市内なるチャアタル、ハウス高等小學校に入つた。時の校長トマス・ウオーカルは有名なる人物、慷慨の士、此のジョン・ウエスレーの將來を頼もしく思ひ、自ら感化の勞を執つた。之れが亦たウエスレーが人と爲りに、大影響を及ぼした。

斯くてジョン・ウエスレーは、齡十七歳にしてオックスフォード大學に入つたが、其の天眞自然の性情猶ほ未だ世に染まず、快活にして華かに、最も古典の教養豐かに、時に諧謔を語り、周圍の人を悦ばす、純良なる好青年であつた。然れども至誠の人魂は、決して社會を看過するものに非ず、居ること暫くにして忽ち憂憤の淵に沈んだ。此ウエスレーが父母の膝下にありしときは、世上を天國の如くに心得て居た。ロンドンに來りし後も、トマス・ウオルカルの教育の下にありしを以て、更に世の不潔を覺ゆる事は無かつた。然るに大學に入るに及んで何事ぞ、大學生の不品行、不敬虔、不誠實、皆之れ言語同斷、驚心駭目の事のみ。此れは已むなく時勢の産み出したる懦弱淫猥なる風俗とは云へ、聞く所何物ぞ、曰く婦人の談、往く所何れの所ぞ、曰く不正の場所、酒を飲み、煙草を燻し、神を瀆し、人を罵しり、喧嘩、爭論、醜行、猥褻の談、日として聞かざるはなく、夜として見ざるはない。此に於て乎、ウエスレーの胸中に勃然として興り來るものは、社會改革の情念、國家革新の大業、神を愛し敎を敬するより起る所の慨慨等にて又制すべくもない。乃ち天眞自然の貴公子、忽ち變じて慷慨義烈の青年となり、諧謔華美の善童、忽ち化して鬱々不樂の人となり、爾來友を絶ちて交らず、私かに密室に祈禱を捧げて、己のが一生の指導を神に祈つた。之れ卽

ちウエスレーが他日風雲を捲いて起つところの源泉であり、礎石であつた。

二

ウエスレー熟々思ふに、此の大業たる、決して一人の力の能くする所ではない、乃ち私かに之を弟チャアレス・ウエスレーに語ると、チャアレスも亦奮つて其人たらん事を希ふと云ふ、そこでオックスフォード大學校の中、最も誠實にして且つ氣骨ありと思はるゝ同志を集め始めた。此に於て平十五人を得た。卽ちベンヂャミン・インガム、ブロウトン・ゼイムス、ハアベイ、及びジョージ・ホキットフヒールドの面々である。會を名づけてホーリークラブ、卽ち神聖倶樂部と稱し、毎夜互に集り、祈禱をなし、互に勵まし、互に誡しめ、人を改めんと欲するものは、己れ先づ改めざるべからず、人の罪を潔めんと欲するものは、己れ先づ其罪を潔めざるべからずと謂ひ、乃ち互に祈り互に勵ますと雖も、青年の常として、誘惑日々に甚しく、今日之を改めて明日亦之を犯し、明日改めて翌日亦其罪に襲はれ、又奈何ともすることが出來ない、互に講讀するところは、トマス・エケンピスの『基督の模範』ビショップ・テイロルの『ホーリー・リビング』『ホーリー・ダイング』等であつたが、兎角之を體得する能はず、只だ苦悶煩憂、互に祈禱するのみであつた。嗚呼此れぞ此れ我明治維新の直前に際し西郷、大久保、海江田等の薩士が、友を離れ、鄕黨を絶ち、私かに相約して、一堂に會し、或は近思錄を讀み、或は傳習錄を講じ、互に切磋琢磨して、以て天下の革命を希圖したる狀態其物ではないか。

さても吾人は、此に一言ジョージ・ホキットフヒールドに及ばざるを得ない。何となれば、ウエスレーの宗教大改革の運動を語らんとすれば、此のホキットフ

ヒールドを語らざるを得ないからである。ホキットフヒールドはウエスレーより十一歳若く、一七四一年グロセスタルの酒肆に生れた。ホキットフヒールドは、自ら『予は母の胎内に居る時よりして剛愎の性であつた』と云ふ如く、彼は幼時より慓悍暴戾殆ど何人の手にも負へなかつた。母の財布や家から金を盗み出す事なぞは、毎度で、少しく長じては、無賴、賭博、喧嘩、至らざる無き惡少年となつた。されば後年彼は『若しも予が彼の儘にして、搖籃の中から成年に達したならば、予は予の罪惡の爲めに、地獄に陷つ可きは必定であつた。若しも神の御惠みの御手が無かつたならば、今頃予は、罪惡の爲めに、暗闇の中、死の陰に投げ出され、永遠限りなき苛責の中にあつたであらう』と云つて居る。然しながら、剛愎暴戾無賴なる彼の内奥深き所には、世にも稀なる大なる美質が有つた。即ち眞純熱烈なる情性と、流露する愛心であつた。彼の母は又た信仰厚き慈母であつた。彼れは早くより父を喪ひ、專ら此の母に育てられた、此の母は貧苦憂愁に沈む時には、何時も宗教書を繙いては、自ら慰むるを常として居た。ホキットフヒールドは、此の貧苦窮乏の中に育つて、物心を覺ゆる十五歳の時、つく〴〵己が前途を考へた、母は貧乏なるが故に、彼を大學に入學せしむる事は、到底不可能である、されば此れ以上の學問は、自分が商人となるには、寧ろ害有つて益無しと思ひ、母に說いて學校を止して、酒肆の手代となつて母の手助けをして居たが、一年ばかりで、母はこの酒肆をホキットフヒールドの兄夫婦に讓つて別居した。ホキットフヒールドは猶ほ兄夫婦の許で働いたが、嫂と仲惡く、そこを飛び出して母の許に來た。母は困じ果てた折しも、オックスフォード大學に知り人有つて、其の人の周旋によつてホキットフヒールドはオックスフォード大學の學僕となつて、學校内に勤むる事になつた、時に十八歳であつた。

然しオックスフォード大學に入つた彼は、其の周圍に對しては、頗る面白くなかつた。彼の數人の同僚は、當時のオックスフォード大學の惡風に染んで、其の醜行汚談は云ふ可くもなかつた。彼は獨り離れて勉强した。同僚は彼をも己等の仲間に入れんものと、種々に誘惑强行すれども、彼は毅然卓落として獨歩し、同僚も彼の異樣なる性格と、其の腕力の强きに恐れて、後には敢て誘惑を試みる事無く、彼の爲すがまゝにした。ホキットフヒールドは慄悍暴戾なりと雖も、資性爛漫情愛亦極めて深く、人の虐げらるゝもの、若くは苦むものあるを見る時は、常に身を其難に投ずるを顧みなかつた。此に於て乎、オックスフォード大學校中其人を尋ぬるに、多くは皆懦弱、無氣慨、不人情の人なるに係らず、獨りウエスレー兄弟のみ、人情界に頭角を現はして居た。卽ち兄ウエスレーの如きは、一日道路を歩みしに、貧窶枯稿の老婦が蹌踉として來り、ウエスレーに哀みを乞ふ、時にウエスレーに金錢無く、乃ち外套を脱いで之に與へて曰く、『是れ今我が有するものゝみ、之を以て食事に供せよ』と、其儘顧みずして去る。是れ兄ウエスレーの恒であつた。弟ウエスレーに至りても、亦た決して兄に讓らず、大凡校中に於て危難に罹るもの、貧苦に沈むものゝある時には、學生共必ずチヤアレスに報ずるを先にせし程であつた。そこでホキットフヒールドは性暴なるも、ウエスレー二人を視る毎に、欽敬措く能はず、何となく心之れに傾きつゝあつた。然るに此に一事件が起きた。ホキットフヒールドの知人にて、老婆なるもの、一日勞働と貧苦の爲に自殺を圖りて遂げず、痛苦轉倒した、人之をホキットフヒールドに報じた。ホキットフヒールド馳せて之に赴きしも、貧生學僕の悲しさ、亦奈何ともなす能はず、卽ちチヤアレス・ウエスレーを思出せしかば、直ちに一書を認め一女子をチヤアレス・ウエスレーに遣はし、且其女を誡めて『お前は私が遣はし

たと云つてはならぬ、只だ默て此書を渡して來い』と云つた。蓋しホキットフヒールドは、チヤアレス・ウエスレーを欽敬したりと雖も、我身の行跡に愧ぢて、又た學僕たる身分に遠慮して、之に接する事を好まず、力めて之を避けたのである。然しながら、彼女は之をチヤアレスに報じた時、約束を忘れて、遂にホキットフヒールドの遣はせしものたるを語つて仕舞つた。元來ホキットフヒールドは、其顏貌の魁偉にして、胸を明け襟を出し、身に襤褸を纏ふも平然として顧みず、日々石炭を運ぶ如き賤業に從事すと雖も、他學生を睥睨するの概あり、是を以て衆呼んで：Singular odd fellow”（へんてこ野郎）と云つた。チヤアレス・ウエスレーも夙に之を見て、心甚だ偉なりとなし、機を得て之に交らん事を欲せし時であつたので、聞いて大いに之を悅び、直ちに馳せて現場に赴き、ホキットフヒールドを扶けて看護に從事し、去るに臨んで、ホキットフヒールドを、翌日の朝飯に招待した。之れ卽ちホキットフヒールドが、『ホーリークラブ』に入るの階梯であつた。

ホキットフヒールド行けば、チヤアレス語るに宗教の事を以てし、且つ告ぐるに己のが經驗、幷に同志者相會して神の義に至らんと欲する次第を陳べ、別るゝに臨んで、スコルゲル著『人心に於ける神の生命』と題する書を與へ、之を熟讀せよ、庶幾くは光明を見ることあらんと、云つた。ホキットフヒールドは欣んで歸り、其の夜之を讀むこと數時間、夜半に至つて心大に動き、殆んど抑制すべくもない、幼年より享けたる母の敎訓、祈禱の涙、多年己が歩みたる惡生涯等を省み來りて、罪惡の念、雲の如くに起り、爾來一週は殆んど絕食の有樣にて、諸事手に着かず、遂に痩せ衰へて階段をさへ昇降し能はざる計りの病體に變じ、醫師を請じて數日病床に臥するに至つた。然し神は堪へ難き荷を負はせ給はず、ホ

キットフヒールドの懺悔、悔改、祈禱の手が、絶ず神の戸を叩きつゝある間に、ウエスレー兄弟も來り會し、之を慰め之を勵まし、漸く元氣を回復して、『ホーリークラブ』の席に相會し、同志等と共に益々安心立命の根據、幷に溌達自由の天地を熱禱した。斯くする事一週亦一週、此に同志者が所謂るペンテコステの日に遭會したのである。

當時ウエスレー兄弟も未だ信仰の苦悶を脱する事出來ず、毎夜祈禱會を開き、毎日曜晩餐の式を守り居りしところ、一夕數時間の祈禱の後、相會するもの忽ち一種異樣の感情を起し來り、其の何れより來り、何れへ往くかを知らずと雖も、何しろ天風の吹き來るが如く、烈火の燃ゆるが如く感じ來つて、又制すべくもなく、忽ち一人の泣いて祈るもの有るかと思へば、又忽ちにして一人の聖靈を受けたりと叫ぶ者有り、『滿場震動の響をなして、濁水は忽ち流れ去り、燒石は天に噴出し去り、胸中潔火に充ち、傍ら清流を濯ふるの心地するに遇へり』とは此の時の出來事を、ホキットフヒールドが後日形容した言辭である。

於是乎これ迄單に秘密會もしくは同志會たりしものが、忽ち變じて傳道會となり、オックスフォード大學の學生に、其の經驗と幸福とを說くは固よりの事、或は去つて親戚に行き朋友に就き、大凡基督信者たるべきものは、內自ら聖靈の火に聖められ、外出でゝ今日の惡社會、惡風俗、惡魔の世界を悔改せしめざるべからずと道破し去つて、遂に八箇條の宣言書を世に公けにするに至つた。卽ち今只其の社會に關する事項のみを擧ぐれば、大略左の如くである。

一に曰く、基督曰く『我父に惠まるゝものよ、汝我が餓えし時我に食はせ、渴きし時我に飲ませ、旅せし時我に宿らせ、裸なりし時我に衣せ、病みし時我を見舞ひ、獄にありし時我に來れり、汝此世の最微者の一人にかく行へるは、卽ち我

に行ひしなりと、之れ吾人が其魂を救ふに於ても、此世の墮落者を救ふに於ても、吾人が信念たるべき標準である』。二に曰く、『吾人は未來の幸不幸を思ふべからず、假令未來に於て幸福たらざる事あるも、尙且つ善事をなさゞるべからず。』三に曰く、『此故に力を盡して善事を實行せよ、飢ゑたるものに食を與へ、渴者に飲を與へ、病めるものに藥を與へ、裸なるものに衣を與へ、監獄を見舞ふて傳道せよ』と云々。

於此乎、ウエスレーを始めとし、ホキットフヒールド其他の同志は、既に此大學生たりし時より、監獄傳道に從事し、大いに此に成功したのであつた。

三

斯くて千七百三十二年ウエスレー時に年二十九、大學を去り同志等と共に、各所を巡回して傳道して居たが、此に將軍ゼイムス・エドワオルド・オグレソーブなる人あり、此人博愛義俠の士にして、夙に社會の墮落し、貧民の訴ふる所なきを憐れみ、自ら奮つて之が救濟の道に從事して居つたが、此に一法案を想起し、目下貧民の負債に苦しみ、又た其の運命を作る望無き者を集め、之を北米ジヨルヂニアの殖民地に送り、之れが運命を開かしめん事を企圖した。そして此の殖民地をば、歐洲に於て迫害される清教徒の避難所ともなし、又たアメリカ土人傳道の中心地ともなす計畫であつた。此の計畫は英國の傳道會社の贊成援助を得て、相當の寄附も集り、國王から土地を與へられた。斯くして此の殖民地を作りたるは、千七百三十二年であつた。そして千七百三十五年に、更に多くの殖民者を募り、尙ほ多くの援助を得べく、英國に歸つて來た。當時オグレソープは、其の殖民地の牧師となつて居たので、兼ねてアメリカ土人の傳道者たる可き若者

一人を物色した、而してウエスレーが其選に當つて、大西洋を横ぎつて北米ジョルヂニヤに赴くことゝなつた。時に千七百三十六年二月五日である。此の時父は世を去り居たれば、年老いたる母を殘して、萬里の波濤を凌いで、新大陸に渡る事は、流石に心に忍びぬので、ウエスレーは故郷エップウオルスに母を省して、其の希望と計畫を述べて、母の意見を求めた。其の時老いたる氣丈の母は、凛然として何の躊躇も無く、『假令ひ私に二十人の男の子が有らうとも、又假令ひ再び會ふ事が出來なからうとも、彼等が全部此の事業に從事する事を喜ぶ』と云つたのである。

ジョルヂニアに於けるウエスレーの働きは、必ずしも成功ではなかつた、然し千七百三十八年ウエスレーの去つた直後に、ホキットフヒールドが、其の殖民地を訪ねた時、『ウエスレー氏の名は此の地の人に取つて、非常に尊貴なものとなつて居た。ウエスレー氏は此の地に確固たる礎を据ゑた、此の礎は何人も、假令ひ天使でも、動かす事は出來ないであらう』と、述べて居る。此時ウエスレーは遂に土人に傳道する事は出來なかつた、否、ジョルヂニヤに於てすら、其成功を保つ事が出來なかつた。其の最大の原因は、ウエスレーの赤心と熱誠とは餘り有るほどあつたが、其の傳道と誘導の方法に於て、殖民地の人心に背馳するものが多かつたからである。又、ミセス・ウキリアムソンとの關係の爲めに、遂に人望を失ひ、非難の聲四方に起り、氣萎え心鬱し、身亦更らに安からず、遂に二年を經ずしてロンドンに踵を回らさゞるべからざる悲境に陷つたのである。傳記家ギブソン註して、ウエスレーは常に婦人關係には不幸であつたと云ふて居る。

されば、ウエスレーはロンドンに歸りし後も、心怏々として樂まず、罪惡の念其胸中に往來して、苦悶して居た、而して彼がロンドンに歸つて四日の後に、彼

を此の時の疑惑と落膽の中から救ひ上げて呉れた人、即ちモレビアン派のベテル・ベーレルに會つたのである。實は二年前ウエスレーが大なる傳道の雄圖を抱いて大西洋を渡る時、同じ船に二十六人のモレビアン派の一團が、監督ダビッド・ニッチユマンに率ゐられて、矢張りジョルヂニアの同派の殖民地に航するのに會つた。此の素朴な獨逸のクリスチャン等は、怎な詰らぬ仕事でも喜んで無報酬で行ひ、常に愉快相で、些かの喧嘩も口論もしない。ウエスレーは長い航海中彼等の一團と接近して、彼等は深く靜かなる信仰と、何事にも亂されざる平靜なる精神を持て居る事を知つた。或暴風の日の夕方、モレビアン派の人達が夕の讃美歌を謠つて居る時に、山なす濤が船の上に崩れかゝり、船中の英國人は、今にも船が沈むかと計り、叫び喚き廻つたが、モレビアン派の人達は、何事も無かりし如くに、平靜のまゝに謠ひ續けた。翌日ウエスレーは其の一人に、『あなたは恐しくなかつたか』と聞くと、『否、神に感謝するばかり』と答へた。『然し女や子供達は恐れなかつたか』と、重ねて問ふと、『いゝえ私の方の女や子供達は、死ぬ事を恐れません』と穩かに答へた。此の深く靜かなる信仰、此の何事にも動せざる精神の平靜、これこそウエスレーが求めて止まなかつたものである。ウエスレーは此の航海で、此のモレビアン派の人達から、非常な影響を受けたのであつた、而して今ベーレルがカロリン群島に傳道に行く途中、英國の同派の信者を訪ふべく來れりと聞いて、ウエスレーは非常に喜び、ベーレルに會つて、ベーレルの滯在中、熱心に其教を聞いた。其の教は、人は信仰によりてのみ義とせらると云ふ、純然たる他力の信仰であつた。此の信仰は神の直接の賜物であつて、人間の德行によつて得らるべきものにあらずと云ひ、なほ細々と多くのさうした宗教的經驗を話した。若しベーレルが云ふが如き情的經驗が、信仰の根本であるなら

ば、ウエスレーは未だ本當の信仰が無い譯である、故にウエスレーは自分を説教する資格無きものとした。然しベーレルは『此の信仰を得るまでは、今持て居る信仰を説くが可い、而して已に此の信仰を得たならば、又其の信仰を説くが可い』と云つた。ウエスレーは、ベーレルの言葉に從ひ、矢張り盛に從來の教を説き廻つて居た。然るに又一日彼れモレビアン派の會に赴いて、説教を聞いて居る中に、彼が常に求めて止まなかつた信仰に到達し得て、彼の信仰に大變化を來した。彼は日記に此の事を書て居る、曰く、『一夜心が進まぬながらも、アルスタースゲート街なる會の集會に出席した。その時一人がルーテルの羅馬書に序したる序文を讀んで居つた。(九時前十五分頃)其の人が、基督の信仰に依つて、神が心に働く變化を述べつゝある際、予の心は不思議に熱くなるを覚えた。予は此時眞に基督を信じ得た。基督こそは予の救主である。そして予は、基督が予の罪、然り予の罪を取り去り、予を罪と死から救ひ下されたと云ふ事の確信を與へられた。』云々と。ウエスレーは此の時、人は己が力にては清くなる能はず、義人は信仰に依て生くべし、吾人は全く身靈共に神に一任して、獨り其恩寵に浴せざるべからず、吾人の苦悶畢竟夫れ徒勞のみ、と云へる説教を聽き來り、心魂忽ち恍惚となり、己が自力的苦悶の非を悟り、遂にモレビアン派の信仰を得たのである。時に千七百三十八年五月二十四日であつた。而して此千七百三十八年五月二十四日は、實にウエスレーの傳記に大書すべき記念日である。そこで彼はモレビアン派に負ふ所大なるを感じて、その本國を訪れんと決心し、六月にロンドンを出發して、アムステルダム、コロン、ラインを通つてマリエンボルンに赴いた。此處はフランクフルトを距る約三十五哩である。此處でモレビアン派の首領ジンゼンドルフに會つた。ジンゼンドルフは此の時九十人許りの傳道志願の者を訓練

して居た。ジンゼンドルフは亦た一代の快男子である。十二三歳の時既に主に在りて大業を起さんことを企て、童子を集めて芥子會なるものを起し、其の帽子の徽章に書せしめて曰く、『我等の中、己が爲めに生き、又己が爲めに死するものなし』と、これ蓋し其主の事業の爲めに生き且つ死するを云ふのである。斯くて遂にモレビアン派の首領となつた。ウエスレーは此處に二週間滯在して、熱心に彼等の訓練を視察し、ジンゼンドルフの說敎を聞いた。更にモレビアン派の首部落ヘルンフットに行き、此處にも二週間滯在して、九月にロンドンに歸つた。(ウエスレーは、當時かくモレビアン派に感化されしと雖も、後又思ふ所あり、モレビアン派が主張する所の他力の信念は、遂に堅實なる善行と相副ふ能はざるを悟り、ウエスレーが所謂『完全』なる信念を抱くに及んで之れと別れた)。

四

千七百四十年、ウエスレーは此に始めて、メソヂストの宗敎團體を起した。是より先き、オックスフォードの同志者は、尙ほ諸方に散在して主の福音を說て居つたが、此年皆其同志者を率ゐて、フアンドリーに會し、愈々大運動に着手することゝなつた、而して其說く所のものは何ぞ。吾人は此に宗敎的運動を云ふことを略し、只其社會的方面の運動を云はゞ、卽ち曰く、『奴隷買賣は人類の恥辱なり、盜賊の所爲なり、基督敎の趣旨に反す、吾人は斷じて、之を排除せざるべからず。曰く、無告の貧民や孤兒を見よ、今や到る所に悲鳴を揚げ、天に向ふて救主を呼ぶ、吾人基督の弟子たる者、如何でか之れを看過し能はんや。曰く、無職の徒、人は云ふ彼等は懶惰なるが故に無職なりと、決して然らず。是れ實に金殿

玉楼に住するものゝ迷夢のみ、實際に就て之を見よ、或は夫れ懶惰にして貧なるものもあらん、然れども其多くは職を欲して職を得ず、自立して職を營まんか、資本なきを如何せん、工場に入て職を求めんか、滿員にして容るゝ地なきを如何せん、其慘狀見るに堪へざるもの比々皆是れなり。驕る者は益々驕り、飢ゆる者は益々飢ゑ、將さに魔王と餓鬼とを見んとす。之を救ふものは誰ぞ、所謂飢ゆるものに食はせ、渴するものに飲ますする主の信者に非ずや。曰く、賄賂横行、（當時ウィルバーフォースが國會議員に選擧せらるゝ時、運動費八千磅を費せしを以ても、其の太甚しきを見るべきである）或は議員選擧の時、或は裁判々決の時、或は牢獄、或は就官、多くは賄賂によりて左右せらる、之れ果して何たる不義の社會ぞ、之れ尙ほ基督教國の美名を冠すべきものか。曰く博奕、曰く酒宴、曰く壓虐、上下到る處に行はれざるなく、而して亡國の徵既に現はる。之れを此れ救ふもの吾人を措て果して誰ぞ』云々。ウエスレー一日マアセルシーの牢獄を見舞ひて、斯く曰つた、『我れ到りしに、彼等は地下の穴に住み、其顏蒼く、黑く、肉落ち、骨出で、恰も痩せたる狼の如く、其顏に平和なく、其目に望なく、氣あるものは冲天の憤を示し、氣なきものは呻吟して蓆上を這ふ、而して其罪の原因を尋ぬれば、多くは皆な貧の結果に出づ、暴政の結果に出づ、社會の罪に出づ。嗚呼彼れ『懶惰なるが故に貧し』と曰へる迂論は、惡魔の敎のみ、諸君もし諸君の眼を以て此等憫然なる無告の民を見るも、尙ほ能く汝の頭の冠を飾り、汝の衣の裾を飾ることを得る乎』と云々。

夫より專ら意を社會の改革に傾け、千七百四十年十一月二十五日、試に十二人の無職なる極貧者を捉へ來りて、之に綿を紡がしめ、若くは淸めしむる事をなし、自活の道を計らしめしに、數月の後大に効を奏し、少しの補助にて彼等を自

立せしむるに至つた。其翌年亦大會に於て之を訴へ、吾人は基督の聖言を實行せんが爲め、宜しく衣食其他道具等を貧民の救助に抛たざるべからずと云ひ、遂に十二人の役員を選び、一會社を興して之に從事せしむる事とした。今の救世軍の如きは、畢竟此型に出でゝ居る。且つ一週一錢寄附の制を定め、會員の各戸に之を出さしめ、貧女には裁縫を敎へ、貧男には繰綿を敎へ、其他授産救助の諸會を興すと同時に、千七百四十八年遂に貧民銀行を立てた。其始め三十磅十六志の集金を得て、之を基本とし、二十志より多額の金を貸さず、且つ週賦として三ケ月間に全納せしむる制としたが、十八ケ月の後に及んで、二百五十人の無職者を救ひ、之を業に就かしむる事を得たと云ふ。

吾人は最早や此等の事業を詳記するを要しない。蓋し本書の主意たる讀者に愛國の至誠と、人道の大義と、誠士が着眼すべき社會改良の大精神を示すことを得ば、卽ち足るからである。吾人は之れを二百年以前の事と思はず、亦之れを雲烟相隔つる事と思はず、目下之を我邦に省みて、悚然亦奮然たる感想を起さねばならない。當今日本の大學生果して夫れ何するものぞ。彼等が會社に入るの道に奔走するを見る、彼等が權門に出入するを見る、彼等が卒業後の榮譽利達を得るに熱心なるを見る。然ども此のオックスフォード大學生の如き義氣あるもの、勇心あるもの、大志あるもの、果して其れ幾許ぞ。彼等は社會問題を研究する、然ども要する所、理論を陳べ、學材を集め、而して之を喃々するに過ぎない。其の血、其の熱の其間に存する幾許ぞ。吾人は熱意誠心のみを以て之に從事せよとは云はない、然し其のジョン・ボールにあれ、バルネットにあれ、トマス・モールにあれ、ラングランドにあれ、大凡如何なる人、如何なる例を問はず、苟も社會問題に從事せんものは、血あり、骨あり、肉あるものたるを要する。機會は人

を待て動く、一萬噸の鐵艦も汽なくば動く能はず、況んや精神界の事業に於てを
や。且人を治めんと欲する者は己れ先づ治めざるべからず、人を正さんとするも
のは己れ先づ正さゞるべからず。當今自ら正し自ら治むるもの幾人ぞ、儒か禪
か、將た基督教か、吾人は之を聽かんと欲するの情に堪えない。滔々たる日本、
風俗壞頽、道心地を拂ふ、既に老ゆるものは惡習牢として拔く事出來ない、獨り
此の大任を委ぬべきは青年學生是れのみである。吾人は必ず其人あるべきを信じ
て、私かに天に依て之を待つものである。

さてもウエスレー、ホキットフヒールドの徒は、此大眼目を率ゐて到る所に叫
びつゝあつたが、元より國教は之を許すべくもない。彼等が諸國教會内にて傳道
する事は、既に早くより禁ぜられて居つた。千七百三十八年の暮には、ロンドン
に於てウエスレーに說教を許す教會は、僅かに三四ヶ所に過ぎなかつた。其時ホ

キットフヒールドはアメリカの大傳道より歸つて來たが、彼も亦ウエスレーの一
味なるが故に、諸教會は彼を拒んだ。止むなくロンドンを去つてブリストル市に
行つたが、そこの諸教會も彼を拒んだ。此に至つて大膽なるホキットフヒールド
は、奮然として破天荒なる試を始めた、即ち野外の大傳道である。アメリカから
歸つた翌年の二月十七日、彼はブリストル市から二哩許り離れたキングスウッド
で、始めて野外の大傳道に着手した。キングスウッドに住む人達は、未だ嘗て教會
の内部を見た事も無く、牧師の說教を聞いた事もない人達で、無知、淫蕩、不信、
殘忍、獸性、法律を恐れず、慈善家も宗教家も皆手古摺て居た代物許りである。
恐らく英國に於て、最も劣惡下等なる民衆であらう。そこでホキットフヒールド
は此處の野外で、渾身の勇を振ふて怒號し始めた。最初には、百人許りの汚い鬼
の樣な坑夫連中が集つて聽いた、而して三週間後の第五回目には、一千人の人が

集つて聽いた、此の石炭の粉に黑くなれる、無智獸性の坑夫共も、ホキットフヒールドの大說敎に接して、未だ嘗て覺えざる感激を覺え、彼等の睡れる靈性は感發して、歔欷流涕止め度なく、其の滿眼より溢れ出づる涙は黑き顏を傳ふて、幾條かの涙痕が汚なき顏に斑々たる有樣、彼等も亦た可憐なる神の子であつた。彼は此に於て勇氣愈々加はり、敎權も迫ひ得ざる、又た如何なる敎會も容れ得ざる大衆を集め得る、新たなる大說敎壇を見出したのである。彼は、最早や說敎の場所も、聽衆にも不自由なく、此の勢でブリストル市內外十二ヶ所に野外說敎の場所を得て、或時には二萬の人が彼の大說敎を聞くべく集ると云ふ勢で、猛火枯草を燒くの概を示して來た。三月三十一日に、ウエスレーもロンドンから來り、其翌日ホキットフヒールドの野外大說敎を聞いた。實を云ふとウエスレーは、敎會外にて人の魂を救ふは罪惡なり、と云ふ國敎の習慣に捉はれて、此の野外傳道は好まなかつた。然し其翌日の午後四時に、ウエスレーも、厭々ながら市外の小高き所に立つて、三千の聽衆に向つて、始めて野外說敎を試みた、この時の彼の說敎は、耶蘇の最初の說敎の如く、イザヤの書を引き來つて、私かに彼自らの抱負と使命を說敎した、而して其の後のウエスレーは、君子豹變で、約一ヶ月の間、幾度か野外に於て大傳道を爲し、終には四千の聽衆を集めるに至つた。かくて此の新しき大傳道をロンドンにも移したが、ホキットフヒールドの如きは、當時ロンドンに於て最も惡き所として有名なるモーアフヒールドに乘り込んで行つた。彼の友人はホキットフヒールドの生きて還らざるべきを恨れたに拘はらず、遂に大迫害を征服し去つて、惡店惡場を掃盡し、ホキットフヒールドが『惡魔の本城』と云つた此の所は、二年の後には敎會が建てられ、つひにロンドンのメソヂストの本城と變じた。勿論此の野外大傳道には、各方面から非難

攻撃された。ウエスレーは彼を責める一友人に書を與へて曰く、『聖書の神は、予に命じて、無知を教へ、惡きを改め、善きを扶けよと、命ずる。人は予に、其は他の教區でやれと命ずる。予の敢て之を爲すは、只だ止むを得ねばである。予には、予の教區無く、今後も無いであらう。然らば予は、神と人と其の孰れに從ふ可きか、神にか人にか、予は此の全世界を予の教區と見做す、即ち予は、何處にてもあれ予の在る所、そこにて之を爲すは適宜の事であり、正しき事であると信ずる。又た、救ひの福音を聞かんと欲する者に、福音を傳ふるは、予が神より命ぜられたる義務なりと信ずる』と。ウエスレーは國教會を離れんとする者にあらず、又た其の規律を紊さんとする者にあらざりしも、其を敢て爲すに至れるは、人の命に從はんよりは神の命に從はんと決心したからである。かくして此より後、彼はあらゆる迫害とあらゆる困難と鬪つて、汽車無き當時に於て、五十年の間二十二萬五千哩を跋渉し、四萬回以上の說教を、二十人以上、二萬人以下の人になし、遂に英國社會を振撼し去つて、十九世紀社會改良家の開祖となりメソヂスト派の大紀念物を跡に遺して、千七百九十一年三月二日、溘然眠るが如く此世を去つた。若しも英國の下層階級が、十九世紀の後半に於て、更に惡化する事なくして、寧ろ改良されたとするならば、若しも社會の安泰に大關係ある下層階級に、法律と宗教に對する關心と尊敬の念が浸潤したとするならば、若しもフランス革命の最惡の事、即ち凡ての社會の秩序に對する急激なる反逆が、英國に起り得ざりしとするならば、歷史家は必ずや此のウエスレーのメソヂスト運動に負ふ所、非常に大なるを認めざるを得ないであらう。

ウエスレーは、昇天前、其老年にも拘はらず、尙ほ大會に出席したる時、一書を認めたる事ありしが、其語に曰く『予は年老ひ將に休まん事を望む、然れども

人は休む爲めに生れず、"Up and be doing" 起つて常に爲しつゝあれ、死が汝の魂に葬式の歌を謠ふまで、働け働け』と。又た彼が臨終の語にして、メソヂスト派の永久の標語となれるは "The best of all is, God is with us!" 『最も善きは神我等と共に在る事』である。彼は盡さんとする全身の力を振ふて、此の語を二度繰返した。以て其性行如何を觀るべきである。ウエスレーの質素なる墓石には『神の特別なる攝理に依り、此の大なる光明が、世界を照らすべく昇れり』と刻されて居る。

五、ウイルバルフオース

ウエスレーは三十六歳より其大運動を初め、二十二萬五千英里を跋渉し、四萬回以上の說教をなし、二百卷以上の書を著はし、其間新聞雜誌に從事し慈善事業に於ては、數十の團體を起し、其感化の大なる事は、遂に英國の社會を其根本より改革した事によりて明かに認めることが出來る。吾人は敢て根本よりと云ふ、何となれば其心意の根柢より之れが改革の業に從事したればなり、彼の所謂狂瀾を旣倒に回すとは、所謂彼れが事の如きを云ふのであらう。其說く所の敎理幷に其傳道の法に至りては、世間往々之れを喜ばざるものありき、彼の有名なるビショップ・バットロルの如きも其一人にして、彼は多年ウエスレーの知己であつた、

然れども一日ウエスレーに逢ひ、激して曰く、汝は特別非常なる默示を得たりと宣言し、聖靈を私して人を壓す、是れ恐るべき事なり、必竟自ら高ぶり、自ら崇むる自惚の所爲のみ、爾今以後我敎界の領内に入るべからずと、殆んど絶交の口調にて退けたる事もあつた。如何にも聖靈を語るものゝ注意すべきことは玆に存する、其過失必ずしもなきにあらざりしならん。彼れベンジャミン・フランクリンの如きは、予はメソヂストたる能はずと宣言した、然れども又曰く、假如其敎理と傳道の法に至りては、我意に落ちざるものありと雖も、予は彼れホキットフキルドの如き、天眞自然にして愛腸慈眼の偉人物を愛せざるを得ず、よしや其弊の指摘すべきものあるにもせよ、彼等が人心を覆へし悔改を迫まり、大風の勢を以て不潔を拂ひ、社會の全面を清むる上に於ては、我其偉大なる感化を認めざるを得ず、予は又此點に於て、ホイットフキルドの說敎を聽くを喜ぶとて、數々其說敎會に赴きたりと云ふ。さればウエスレーが死後、若しくは其生存中に起り初めたる英國平民の先導者、若しくは首領たるものは、多くメソヂストより出でたるを見るのである。ウイルバルフォースも亦是れ其風を聽いて起ちたるものゝ一人であつた。彼は終身メソヂストではなかつた。然れども其熱血は寧ろメソヂストの模型にして、其悔改の事蹟も亦頗るウエスレーに類したるものがあつた。

ウイルバルフォースは、千八百五十九年八月廿四日英國ホルに生る、ヨークシヤイルなる貴族の一人にして、富豪家の息子である、幼にして軟弱、細身、小軀、神經質の性を帶びたる、一見可憐の貴公子であつた。然れども學才衆に秀で、其ホル小學校に在りし時なども、其記憶の堅實にして、理解の速かなる事等、屢々敎師を驚嘆せしめ、常に生徒の首座を占め、學校第一の華なりと謂れた。九才に

して父ロベルト・ウイバルフォース死し、伯父の家に預けられ、ロンドンの學校に通學す。伯母は時にウエスレー若くはホキットフキルトの說敎を喜び、大に其精神に感化され居たりしかば、時々メソヂスト的口調を以て、童子ウイルバルフオースを敎へ、他日大に神の爲に盡すべきことを鼓吹したりしが、故郷に在る伯父並びに實母は、當時未だメソヂストを喜ばざる者なりしかば、彼が寧ろ其伯母の感化を受くることを厭ひ、氏を其膝下に呼び戻した。氏歸り來りて母と論じ、其メソヂストの決して異端ならざるを以てした。母曰く、若し夫れ神の植ゑ玉ひし者ならんには、人之れを拔く能はず、汝が精神既に其處に在らば、假令家に歸り來るとも、必ずや之を亡ふ事勿かるべしと云々。ウイルバルフォース已むを得ず郷里に留り、夫よりボックリントン中學校に入り、業益〻進む。此時まだ十四歳なりしが、一文をヨーク新聞に寄送し、其の掲載を求む、題して「人肉を賣買するものは咒はるべし」と云ふ、蓋し是れ奴隷賣買の不正なるを論じたるものなり。當時記者は之れを沒書として省みざりしが、彼れが夙にウエスレー等の說敎を傳聞し、義氣慷慨、幼にして既に其精神を洩らしたるものありしことを察すべきである。聞くウエスレーは其死する一週間前病床にありし時、ウエスレーの信者の一人にして、英國より奴隷を排除せんとの大志願を起したるものありと聞くや、其將に死せんとしつゝある大患をも顧みず、病床より直ちに一書を裁し、之に送りたるものがある、其書に曰く「往けよ、兄弟、神の名によりて往け、只に英國のみと曰はず、今日迄大陽が曾て見たる事なき大逆無道なる亞米利加の奴隷を禁止する迄往け」と云々。是れウエスレーが臨終最後の書翰なりしと傳へらる、然らば則ちウエスレー等が如何に大聲疾呼して奴隷賣買の不正を說きたるかを知るべきである。

ウイルバルフォースは、幼にして既に此大精神を帶びたりしが、十九歳にして、ケンブリッヂ大學校に入るに當つて忽ち世の惡習を帶び、見る〳〵墮落の淵に沈んだ。ウイルバルフォースは富豪の子、可憐の公子、愛嬌溢るゝ青年であつた。此を以て誘惑一層甚しく、氏の部屋は忽ち遊冶郎の倶樂部と化し去つた。ウイルバルフォースは精勵好學の性なりしが、然も其自白する所によれば、此時殆ど誘惑し去られて居つた。彼れ自ら云ふ、當時彼は勉强を欲したりと雖も、友人等皆來りて曰く、汝富豪の子何ぞ勉强を要せん、坐して以て食すべきなり、青年再びあるべからず、遊ぶべき時に遊ばずんば遊ぶの機なからんと云々。之れ友人が數々予に呈したる勸告なりし。於之乎、當時の惡習であつた歌留多、玉突、飲酒、博奕に耽けり、以前の精神は溝として其胸中を去つた。然れども亦其手記する所によれば曰く、予は一夕賭博して百ボンドを失つた、而して亦一夕にして一人の友人より六百ボンドを獲得した。其時其友人は頗る憂苦し殆んど縊死を計らんとする有樣なりければ、人情之を見るに忍びず、夫れより以後飜然悔い改めて、斷然賭博を禁ずるに至つたと云々。是れ彼れが抑も墮落界より救はれたる第一段であつた。又時のケンブリッヂに一人の人物があつた、ウイリアム・ピット其人である。ピットは二十四歳にして、既に英國大宰相の地位に上れるもの、其偉大なる人物であつたことは明かである。當時彼れはケンブリッヂの學生で、ウイルバルフォースと相親しむこと最も深く、遂に彼れが終身の志望たる政治の大義を屢々之に告げ、他日共に與に政治界に運動すべきを以てせしかば、彼れ心頗る動き、爾來政治家たるを以て任ずるに至つた。之れ氏が墮落界より救はれたる第二段であつた。さればウイルバルフォースは、二十歳にして大學を終へ、直ちに政治界に闖入した、乃ち一千七百八十年、ホルより奮起して國會議員を爭ひ、〳〵爭者二名

ありしに拘はらず、此二名の得票數を合したよりも、尙優れたる多數を以て當選した。これ彼れが舊家の出なると、學才なると、秀麗なる美青年たるとにより、玆に至りしものなりとは云へ、其運動費に八千磅を費したりと云ふを以て之を觀るも、尙時の弊風、並にウイルバルフォースが當時尙ほ虛榮に驅られ居たりし事を見るべきである。然りウイルバルフォース自ら曰く、當時予が國會議員を爭ひたるは、決して愛國の至性純情より出でたるに非ず、社會改革の熱血より出でたるにも非ず、單へに名譽と娛樂の觀念より出でたるものであると。

ウイルバルフォースは、辯論更らに豪快ならず、濃かに叙述するを得たりと雖も、其語調至て寬に、又力なかりし。玆を以て一回も大辯論を試みず、只米國獨立戰爭に反對して、寧ろ讓るべきを論じたるを見るのみ。亦ビットと與にグースツリー倶樂部の牛耳を把りしと雖も、自ら超然として獨立を持し、何れの黨派にも屬せざりし、又嘗てヨークシャイアの州會議員を爭ひたりしが、當時身は富貴の家族たりしと雖も、專ら平民の味方となり、平民的主義を持し、貴族に逆つて抗立し、遂に爲に平民の人望に由て、競爭者を壓伏し去り、殆んど獨舞臺の狀況にて選擧せられしが如きは、假令虛榮に驅られたりとは云へ、其間一片の眞情掬すべきものがあつた。

宇氏の改心

請ふ少しく宇氏の改心を說かん。ウイルバルフォースは、當時宗敎の念慮至つて乏しく、其幼時に在つてメソヂストに成化されしものなりしと雖も、其青年たり、政治家たるに至りては、亦之を顧みざるの觀があつた。斯てあること多年、二十六歲の時に及んで、玆に再び宗敎心が動き初めた。彼もウエスレーの如く、

一日モレビアン派の教師に接し、大に其宗教を說かれて、心少しく動いた、然し尙未だ意としなかつたが、其政治界の腐敗、其社會の壞敗を見て、自ら省みる所あると同時に、漸く宗教の觀念に其心を苦め始めた。曰く、予はクリスチャンの會堂に集り、クリスチャンの歌を謠ひ、クリスチャンの祈禱を捧ぐるが、併し心果してクリスチャンたるべきか、大凡クリスチャンたるべきものは、社會風俗の壞頽を見ては其心を動さねばならぬ、聖靈の人心の間に苦しむのを見ては、大に自ら省みざるを得ない。我は果してクリスチャンの生涯を送りつゝあるや否やと、そこで一日閑靜に其身を處せん事を望み、其姉妹と其母とを伴ひ暫らく遊歷の途に上つた、當時牧師アイザック・ミロルをも伴ふた。これは旅行中彼れによりて信仰の道を學ばんと志したからである。一日他より贈られたる母の所持品中にドットリッヂ氏著「靈魂に於ける宗教の進步」なる書物を見、ミロルに問ふて曰く、此書如何、ミロル答へて曰く、之れ實に金玉の言、人心第一の糧なりと、そこで之を讀むこと數日、興來つて感倍〻深く、果ては苦悶の淵に淪み、歸來密かに身を脫して田舍に微行し、幽思冥想の行を積に及んで、心益々平かならざりしが、翌年四月「イースター、サンデー」に會し、敎會に出づるに及んで、始めてキリストの愛の大義に感じ、心稍々平和を得、夫れより身を政界より拔いて、神に事へん事を決心した。これ實に將來ウイルバルフォースが大業の角石となつたものである。ウイルバルフォース以謂らく、政治は外形に現はるゝ自然の結果のみ、國民の良心、社會の氣風、之れ實に之れが根柢をなす者である、此根柢にして立たずんば政治は遂に徒勞に歸せん。而して之を爲すもの、獨り忠實の精神とクリストの心あるのみと。此に於て自ら決して曰く、"To resist the spread of open immorality"『社會の不義不德に反對して立つ、之れ我事業なり』と、然れど

も未だ專ら奴隷禁止の運動に、其身を投せんとは思はなかつた。其愈々奴隷禁止運動に從事したるは、尙後日の事なりしと雖も、其源頭は全く此クリストの愛に感じ、社會の不道德に反對して、起たんと期したるの一大精神に在る事を知らねばならぬ。

奴隷禁止

抑も奴隷制度の暴逆無道なる事は、今更言ふを須たざるべし。千七百年より千七百八十六年卽ち宇氏が悔改決意の時まで、英船が黑奴をヂャマイカに送りしもの、實に其數六十一萬人に上り、船が西印度へ奴隷を運びたる事、甚だしき時は十年間年々四萬人以上に上りたりと云ふ、以て其大數を見るべきである。若し夫れ之れに和蘭、西班牙、葡萄牙諸國の船舶が運び去り運び來る數を加へ來らば、其數幾百萬なるかを知る事が出來ない、而して彼等が如何にして此多數の黑奴を捕へ來るかと云ふに、唯夫れ猿獵の如きのみ、猪獵の如きのみ、一錢も爲に拂ふにあらず、一物も與ふるに非ず、只銃と繩とを以て之れを捕へ來るのである。彼れルヽの話の如きは、如何に其殘酷なるべきを見るのである。ルヽは亞弗利加の一酋長の少女であつた。一日母の命を帶びて、川畔に食草を摘んで居つたが、忽ち長軀赤顏の歐人あつて、數人躍りかゝつて、ルヽと同侶の數人を捕へ、之を麻の袋に入れ、直に擔ひ去つて、駱駝に乘せ、其悲鳴叫喚するをも顧みず、アレキサンドリヤの市場に拉致し、之れに一々値札を附し、街上に晒らして賣捌いた。予は玆に此等の談話を多く擧げぬ、唯々其一例を示すのみ。當時の英國は斯る暴戾の國であつた。其國民は殘逆無道の民であつた。然れども亦其人なきにあらず、彼れトマス・クラークソン、グランビル・シャープの如き、ウイルバルフォースの如き、

スと其時を同うして居つた。トマス・クラークソン一日奴隷問題に關する懸賞文の募集あることを聞き、當時ケンブリッヂ大學在學中なりしが、單に其賞に與からん事を欲し、專ら奴隷問題の材料を蒐めつゝあつた、然るに其材料を蒐むるに從ひ悲慘の情堪え難く、一日自ら其原稿を抛ち、起つて曰く、我れ亦斯る空文に從事する能はず、我正さに實際の大運動に着手せざるべからずと。卽ち其身を挺して奴隷禁止の運動に從事したのである。有名なるグランビル・シャープ一日ロンドンの市街を通行せる時、黑奴の道に斃るゝものあるを見、抱き起して其狀を尋ぬれば、黑奴答へて云ふ、我が主我が病んで亦起つ能はざるを見るや、無益の食潰し、之を棄つるに如かずとて、今正さに我を棄てたるなりと。シャープ之を聽きて、呟然涙を垂れ、老且病みたる黑奴を勞はり、連れ歸りて、之を病院に入れ、懇に治療を施さしめしに、幸にして癒えたれば、爾後之を奴隷と爲さず、純粹なる家僕として已が家に養ふた。斯くて數月を經たる後、舊主人某此黑奴の街路を往來するを認め、直に捕へて之を官衙に訴へ、逃亡者の罪名を以て牢獄に投じた。シャープ聽て大に怒り、直ちに談判を始めたが、彼れ頑として應せず、遂に法庭に訴へ、大辯論の上、大凡黑奴たりとも、一旦英國に其歩を運び入れたるものは、卽ち自由たるべしとの宣言を受くるに至つた。之れ實に奴隷禁止者が初めて勢援を得たる者にして、後直ちに奴隷禁止會なるものを起し、グランビル・シャープを其會長に選んだ。時維れ千七百八十七年三月廿二日、卽ちウキルバルフォースが奴隷禁止に其心を決したる翌年の事であつた。

議院内外の運動

斯くウイルバルフォースは、幼年にして純良、潔白、可憐、可愛の資質を現

はし、青年にして、漸く墮落の域に沈み、一旦飜然として其本心に立歸り、罪を悔い、誠を擁べ、俯仰不愧の人たらんことを期して至らず、苦悶數旬、遂にキリストの心を以て心となすに及んで、始めて濶達自由の天地に出で、其よりメソヂストの蹤に倣ふて、說教者たらんか、牧師たらんか、若くは亦監督會の僧侶たらんかと、種々思考する所あつたが、遂に己のが經歷、己が地位、及び目下の國狀に思ひ至り To resist the spread of open immorality 之れ我が天職、キリストの心が我に命じ玉ふは、彼に非ずして此に在りと決心し、遂に其身を奴隸禁止の一事に拋つたのである。そうして其初めて奴隸禁止案を彼が國會に提出したのは、實に千七百八十七年三月九日であつたと。

ウイルバルフォースは此日議案を提出して、自ら奮つて初陣の大議論を國會に試みんと欲したのであつたが、俄然病氣の爲めに缺席する事となつたので、之れをウキリアム・ピットに依托し、代つて大に論せしめた。然れども惡習の牢として拔く可らざるや、假令盛威飛鳥を落すピットを以てしても、議場は唯罵るもの笑ふものあるのみで、聊も通過する望なかりければ、其贊成者の一人、サー・ウキリアム・ドルベーは更らに動議を起し、然らば切めては奴隸運搬の英船には定數を限り、決して之を超過せしむべからざる事、並に黑奴にして若しも疾病に罹るときには、能く之を看護救助する事を命ずべしとの議案を提出し、漸にして此事のみが通過した。越て翌年卽ち千七百八十九年の國會には、ウイルバルフォースは、有名なる大演說をなした、ウキルバルフォースは、此日三時間の長演說を試みた。大政治家ボルク之を聽き、後語つて曰く、今日のウイルバルフォースの大演說は、實に主義明確、議論堂々、慥に近代予が耳にしたる大演說の一にして、殆んど古代希臘の大演說家を聽くの感があつたと云々。フオクス

も之を聽いて、贊成して立つた、ピットも亦曰く、此議論は考ふれば考ふる程、正正堂々又當る可らず、吾人は之に贊成せざらんと欲するも能はざるものであつたと云々。然らば議會は之を通過せしめたるか、否々、古往今來、利害得失存亡の觀念に動くもの所在皆是である。假令如何に理なるも、義なるも、道なるも、一たび人心の慾之を襲ふときには、卽ち混沌として正邪曲直席を紊だし、其分別を失し、一人の正論公理に由りて、容易く實行せらるべきでない、於之乎衆曰く、理固より然るべし、然ども若し夫れ奴隷を廢せば、我が大繁榮の都府リバープールの如きは、忽ち疲弊の底に沈んで、忽ち塵芥の市と化し去るべし、曰く英國も漸く貧乏墮落の底より其頭を揚げ出したる所なり、今にして奴隷廢止の如きものを決行せば、忽ち貿易界に大恐慌、大破損を來たし、再び又墮落の底に沈まざるを得ざるべしと。於之乎慾遂に道理を生み、道理遂に一種の辨を借り、此に亦斯く論ずる者もあつた。曰く奴隷賣買、非理は卽ち非理なりと雖も、之れ一を知つて二を知らざるものなり、彼等は亞弗利加の原野に蟲を食つて棲息するものなり、同胞相食むで暮らすものなり、之を文明の國に移し、之れに衣食を與へ、之をして又禽獸界に居らざらしむ、之れ我が德澤に非ずして何ぞや、且つ夫れ之に基督教を敎へ、基督教の福音を聽かしむるを得ば、彼等の魂や救はるべし。然らば則ち畢竟吾人は、彼等の益を計る者たるに至ると云々。斯くてウイルバルフオースの議案は全廢に歸し了つた。嗚呼實に當時に在りては其議の行はれざる事、殆んど泰山を挾て北海を越ゆるの感があつたのである、然れども其遂に正義を貫き、猛叫烈喚宇內到る處に電雷を轟かし來り、果ては北米四年の大戰を通じ、百萬人の生靈を犧牲にし、數百千萬の奴隷を自由の天地に放たしめたる、宇氏の大勳大義、今日より之れを思へば、尙ほ其餘烈に感奮せざるを得ないのである。

若し夫れ議院以外の景況を曰はんか、友人マンカスター侯は、元より宇氏の友人にして、亦最も奴隷廃止に熱心なる一人なりしが、而かもウイルバルフォースに語て曰く、君請ふ少しく思返せよ、時尚ほ早し、之を云ふも徒勞に屬せむ、予は今日に至るまで、逢ふ人毎に此問題に就て語らざるはない、然れども我等笛吹けども彼等躍らず、殆んど馬耳東風の感あり、彼等は笑はざれば卽ち聽き棄てにして去る、予は暫く君に時を待たん事を勸告すと云々。然れどもウイルバルフォースは、益々其奮鬪を續けた。此時ジョン・ウエスレー將に死せんとして、病床に在りしが、ウイルバルフォースが其正義の爲めに失望せざらん事を慮り、病を押し、筆を執つて之れに與へて曰く、神若し汝を支へずんば、汝は必ず人と惡魔とのために斃さるべし、然れども神若し汝を支へば、誰れか汝に敵せんや、「オー善をなして倦むこと勿れ、」（是れウエスレーが畢世の銘語なり）唯々神の名と其力に據て往け、當に英國英領のみには非ず、太陽が見たる最惡物、卽ち亞米利加の奴隷を廢する迄往け、願くは幼年の昔より汝を導ける神、今も汝と共に在り、汝が爲す總ての事に神の存在あらん事を、之れ死せんとする老人が祈なり云々と、（此書を送りしは一千七百九十一年二月廿四日にして、ウエスレーは其翌月二日に永眠せり）

人心の冷淡と、國會の失敗に加へて、此にセント・ドミンゴに於て黑奴の一揆起れり、之れ黑奴が人權自由の說を聽き、哀れにも席旗を飜して、其奴隷主に反對したものであつたが、於之乎人心益々反抗し來り、皆曰く、看よ奴隷にして自治を唱ふ、是れ小兒に刄物を持たしめたると一般、偶々其身を害するに至らんのみ、自由は獨立の者に非ずんば許す能はず、獨立は敎育なきものに爲し能はざる所なり、若し夫れ愚に彼等に人權自由の說を敎へなば、益々彼等を生意氣の地に落し、